

栃尾市市内遺跡発掘調査報告書



仲崎遺跡出土『河童形土偶』

2005

新潟県栃尾市教育委員会

序

栃尾市は、「栃倉遺跡」をはじめとした縄文時代の遺跡が数多く発見され、中世には、上杉謙信公旗挙げの地として知られており、近現代では、数々の自然災害に悩まされながらも苦難を乗り越え、機織物の産地として成長を遂げてきた、歴史豊かな山紫水明の郷です。しかし近年、不況に瀕している日本経済に同調するように、栃尾市においてもまさしく基幹産業である機織物を中心として不況の渦中にあり、雇用の著しい減少が生じ、それに起因する人口の減少傾向に歯止めが効かない状況になっています。

公共事業、民間投資事業におきましても、年々減少傾向になっておりますが、その中で埋蔵文化財の調査業務を続けているところです。

本報告書は平成12年度から平成16年度にかけての遺跡試掘調査、確認調査等の中から特に顕著な成果が得られた調査結果をまとめたものです。各調査は栃尾市教育委員会が調査主体となり、新潟県教育庁文化行政課の多大なる協力を得て実施してまいりました。これらの調査結果に基づいて、今後の確かな判断材料とするとともに、教育者、またはその教育を受ける児童、生徒に郷土をより深く知ってもらうことを目的として、このたび刊行するはこびとなりました。

特に市町村合併が高らかに叫ばれている中で、栃尾市としては最後になるこの報告書の意義を市民だけでなく、市外の方々にもご理解いただければ幸いです。

最後に、これらの調査や報告書の編集に際し、ご指導、ご助言を賜った、関係機関の皆様方に厚く敬意を表するとともに、改めてお礼申し上げ、感謝の意を表します。

平成17年3月20日

栃尾市教育委員会

教育長 諏 佐 實

目 次

第 I 章 序 言

1 報告書作成に至る経緯	1
2 調査の経過、調査体制	2

第 II 章 遺跡の位置と環境

1 栃尾市の地理的環境	4
2 歴史的環境と市内の遺跡	5

第 III 章 調査の結果

1 仲崎遺跡	9
2 宮中遺跡	18
3 四ツ割遺跡	24
4 平中野俣塚群 (荒田 1 号塚・2 号塚・3 号塚)	31
5 金沢 (A) 遺跡	37
6 長太郎薬師	41
7 井田塚	45

第 IV 章 考 察

1 仲崎遺跡の遺物について	50
2 宮中遺跡の遺物について	53

《引用参考文献》	58
----------	----

例 言

- 1 本報告書は、以下の遺跡に関する試掘、確認調査の記録である。
 - ① 新潟県栃尾市大字入塩川字仲崎3196ほかに所在する仲崎遺跡
 - ② 新潟県栃尾市大字上檜出字宮中1884ほかに所在する宮中遺跡
 - ③ 新潟県栃尾市大字島田字四ツ割68-丙ほかに所在する四ツ割遺跡
 - ④ 新潟県栃尾市大字平中野俣字荒田1059-5ほかに所在する平中野俣塚群
 - ⑤ 新潟県栃尾市大字金沢字片桐67に所在する金沢(A)遺跡
 - ⑥ 新潟県栃尾市大字北荷頃字高森1524ほかに所在する長太郎薬師
 - ⑦ 新潟県栃尾市大字葎谷字井田302ほかに所在する井田塚
- 2 発掘調査は栃尾市教育委員会が調査主体となり、国庫補助対象事業として平成12年度から平成16年度にかけて実施した。
- 3 調査期間は第Ⅲ章各遺跡の発掘調査に記する。
- 4 本報告書の刊行は栃尾市教育委員会が主体となり、国庫補助対象事業として平成16年度に実施した。
- 5 本書の執筆分担は次のとおりである。
 - 第Ⅰ章・第Ⅱ章 酒井俊明（栃尾市教育委員会生涯学習課）
 - 第Ⅲ章 1・5・6・7 加藤学氏（新潟県教育庁文化行政課）
 - 第Ⅲ章 2・3 上村利明（栃尾市役所）・加藤学氏
 - 第Ⅲ章 4 上村利明
 - 第Ⅳ章 小熊博史氏（長岡市立科学博物館）
- 6 本書の編集は、加藤学氏、小熊博史氏、上村利明の指示のもとに酒井俊明が行った。
- 7 出土遺物及び調査、整理に係る各種資料、データ類は栃尾市教育委員会で一括保管している。
- 8 遺物の実測、拓本、遺構図のトレース及び各種図版作成に関しては、(株)みくに考古学研究所に委託し、実施した。
- 9 埋蔵文化財分布図作成及び表紙の遺物写真撮影に関しては、三条印刷(株)に委託し、実施した。
- 10 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々から多くのご教示、ご協力を賜った。ここに記して厚くお礼申し上げる次第である。（敬称略 五十音順）
石川智紀 高橋一功 寺崎裕助 長澤展生 松縄隆之 渡辺裕之
新潟県教育庁文化行政課 長岡市立科学博物館

第I章 序 言

1 報告書作成に至る経緯

当市の埋蔵文化財発掘調査の歴史は昭和30年、31年に実施した栃倉遺跡発掘調査まで遡る。時を同じくして市内の有志からなる栃尾市考古学研究会という組織が編成され、数々の遺跡が発見されることとなった。現在まで、128を数える市内の遺跡があるが、その多くは彼らにより発見されたものである（6ページ参照）。

その後、公共事業などで確認調査を実施したことにより性格、範囲が明らかになったものや、新発見されたものなどが加わり現在の分布となっている。

そのような状況の中で、平成12～16年度に調査を実施した箇所の中に特に顕著な成果が見られたものを報告書にまとめることにした。

その代表となるものが大字入塩川地内で確認調査を実施した仲崎遺跡である。本遺跡は入塩川集落から南に1.5kmほど山中に入った小高い山の山頂付近に位置する。平成15年度に実施した確認調査において縄文時代の住居跡、河童形土偶をはじめとして、多数の遺構や縄文土器が発見された。また、大字上檜出地内の宮中遺跡において市道改良事業の工事立会中に遺構が発見され、掘削したところ、縄文土器片とともに、完形のコップ形土器が発見された。

このような貴重な資料が出土していることを踏まえ、調査経緯を周知し、今後の協議資料とするとともに学校教育現場においても学習教材として活用することができるよう報告書を刊行することとした。

遺跡名称	種別	調査期間	調査体制
仲崎遺跡	試掘	H14. 7. 8 H14. 7. 12	調査主体：栃尾市教育委員会（教育長 箕輪武典） 事務局：栃尾市教育委員会生涯学習課 総括：栃尾市教育委員会生涯学習課長 河井 裕 管理：栃尾市教育委員会生涯学習課文化振興係長 渡辺 均 担当：栃尾市教育委員会生涯学習課主査 上村利明
	確認	H15.10.27 } H15.10.31	調査主体：栃尾市教育委員会（教育長 諏佐 實） 事務局：栃尾市教育委員会生涯学習課 総括：栃尾市教育委員会生涯学習課長 河井 裕 管理：栃尾市教育委員会生涯学習課文化振興係長 渡辺 均 担当：新潟県教育庁文化行政課文化財調査員 加藤 学 新潟県教育庁文化行政課主任調査員 松縄隆之 事務局：栃尾市教育委員会生涯学習課主事 酒井俊明
宮中遺跡	試掘	H12. 5. 22 } H12. 5. 26	調査主体：栃尾市教育委員会（教育長 田村尚一） 事務局：栃尾市教育委員会社会教育課 総括：栃尾市教育委員会社会教育課長 大崎了介 管理：栃尾市教育委員会社会教育課副参事 猪俣茂俊 調査担当：栃尾市教育委員会社会教育課主査 上村利明 栃尾市教育委員会社会教育課主事 多田信昭 庶務：栃尾市教育委員会社会教育課主事 小浦絹代
	立会	H15. 6. 2	調査主体：栃尾市教育委員会（教育長 諏佐 實） 事務局：栃尾市教育委員会生涯学習課 総括：栃尾市教育委員会生涯学習課長 河井 裕 管理：栃尾市教育委員会生涯学習課文化振興係長 渡辺 均 担当：新潟県教育庁文化行政課文化財調査員 加藤 学 事務局：栃尾市教育委員会生涯学習課主事 酒井俊明
四ツ割遺跡	分布	H14. 4. 19 H14. 4. 22 } H14. 4. 26	調査主体：栃尾市教育委員会（教育長 箕輪武典） 事務局：栃尾市教育委員会生涯学習課 総括：栃尾市教育委員会生涯学習課長 河井 裕 管理：栃尾市教育委員会生涯学習課文化振興係長 渡辺 均 担当：栃尾市教育委員会生涯学習課主査 上村利明 栃尾市教育委員会生涯学習課臨時職員 木口隆寿
	試掘	H14. 8. 21 } H14. 8. 23	調査主体：栃尾市教育委員会（教育長 箕輪武典） 事務局：栃尾市教育委員会生涯学習課 総括：栃尾市教育委員会生涯学習課長 河井 裕 管理：栃尾市教育委員会生涯学習課文化振興係長 渡辺 均 担当：栃尾市教育委員会生涯学習課主査 上村利明
	試掘	H15. 5. 13	調査主体：栃尾市教育委員会（教育長 諏佐 實） 事務局：栃尾市教育委員会生涯学習課 総括：栃尾市教育委員会生涯学習課長 河井 裕 管理：栃尾市教育委員会生涯学習課文化振興係長 渡辺 均 担当：新潟県教育庁文化行政課文化財調査員 加藤 学 新潟県教育庁文化行政課主任調査員 高橋一功 事務局：栃尾市教育委員会生涯学習課主事 酒井俊明
	確認	H15.10.30	調査主体：栃尾市教育委員会（教育長 諏佐 實） 事務局：栃尾市教育委員会生涯学習課 総括：栃尾市教育委員会生涯学習課長 河井 裕 管理：栃尾市教育委員会生涯学習課文化振興係長 渡辺 均 担当：新潟県教育庁文化行政課文化財調査員 加藤 学 新潟県教育庁文化行政課主任調査員 松縄隆之 事務局：栃尾市教育委員会生涯学習課主事 酒井俊明

遺跡名称	種別	調査期間	調査体制
平中野侯塚群 (荒田1号塚・ 2号塚・ 3号塚)	分布	H14.11.18 H14.11.20 H14.11.21	調査主体：栃尾市教育委員会（教育長 箕輪武典） 事務局：栃尾市教育委員会生涯学習課 総括：栃尾市教育委員会生涯学習課長 河井 裕 管理：栃尾市教育委員会生涯学習課文化振興係長 渡辺 均 担当：栃尾市教育委員会生涯学習課主査 上村利明
	試掘	H14.12.9 H14.12.12	調査主体：栃尾市教育委員会（～H14.12.10教育長 箕輪武典） （H14.12.11～教育長職務代理者庶務課長 鈴木慶明） 事務局：栃尾市教育委員会生涯学習課 総括：栃尾市教育委員会生涯学習課長 河井 裕 管理：栃尾市教育委員会生涯学習課文化振興係長 渡辺 均 担当：栃尾市教育委員会生涯学習課主査 上村利明
金沢(A)遺跡	確認	H15.7.10	調査主体：栃尾市教育委員会（教育長 諏佐 實） 総括：栃尾市教育委員会生涯学習課長 河井 裕 管理：栃尾市教育委員会生涯学習課文化振興係長 渡辺 均 担当：新潟県教育庁文化行政課文化財調査員 加藤 学 事務局：栃尾市教育委員会生涯学習課主事 酒井俊明
長太郎薬師	分布	H14.8.28 H14.9.30	調査主体：栃尾市教育委員会（教育長 箕輪武典） 事務局：栃尾市教育委員会生涯学習課 総括：栃尾市教育委員会生涯学習課長 河井 裕 管理：栃尾市教育委員会生涯学習課文化振興係長 渡辺 均 担当：栃尾市教育委員会生涯学習課主査 上村利明
	試掘	H15.5.14	調査主体：栃尾市教育委員会（教育長 諏佐 實） 総括：栃尾市教育委員会生涯学習課長 河井 裕 管理：栃尾市教育委員会生涯学習課文化振興係長 渡辺 均 担当：新潟県教育庁文化行政課文化財調査員 加藤 学 新潟県教育庁文化行政課主任調査員 高橋一功 事務局：栃尾市教育委員会生涯学習課主事 酒井俊明
井田塚	分布	H14.12.2	調査主体：栃尾市教育委員会（教育長 箕輪武典） 事務局：栃尾市教育委員会生涯学習課 総括：栃尾市教育委員会生涯学習課長 河井 裕 管理：栃尾市教育委員会生涯学習課文化振興係長 渡辺 均 担当：栃尾市教育委員会生涯学習課主査 上村利明
	試掘	H15.10.29	調査主体：栃尾市教育委員会（教育長 諏佐 實） 総括：栃尾市教育委員会生涯学習課長 河井 裕 管理：栃尾市教育委員会生涯学習課文化振興係長 渡辺 均 担当：新潟県教育庁文化行政課文化財調査員 加藤 学 新潟県教育庁文化行政課主任調査員 松縄隆之 事務局：栃尾市教育委員会生涯学習課主事 酒井俊明
	試掘	H16.5.31 H16.6.4	調査主体：栃尾市教育委員会（教育長 諏佐 實） 総括：栃尾市教育委員会生涯学習課長 矢澤栄一 管理：栃尾市教育委員会生涯学習課文化振興係長 渡辺 均 担当：新潟県教育庁文化行政課文化財調査員 加藤 学 事務局：栃尾市教育委員会生涯学習課主事 酒井俊明

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

① 栃尾市の地理的環境

栃尾市は長岡市、見附市、下田村、魚沼市、山古志村に隣接する。新潟県のほぼ中央に位置し、総面積204.92km²、人口約24,200人の小都市である。守門岳を源流とする刈谷田川をはじめ、西谷川、塩谷川等で形成された河岸段丘と小盆地からなる「水と緑と織物のまち」である。

市の地形は、南側から西側にかけて、標高1,548mの守門岳の裾野が広がり、西側は東山丘陵の裾野が広がる。また市街地西側に、栃尾城跡がある標高227mの鶴城山が位置し、市街地は典型的な盆地形状となっている。

天候は、冬期間は国内でも有数の豪雪地であり、多い年では、市街地では1.5m～2m、山間部では3m以上の積雪を測る。風速は1年を通して弱く、平均0.3m/sec～0.5m/sec程度で推移している。盆地性気候により梅雨時期から夏にかけて、朝夕の気温の差が激しく、極めて湿度の高い日が続く。

遺跡との関係を見てみると、今日でも、人間の生活に水が大切であるように、先史時代の人々にとって水はことに大切であったことが分かる。栃尾市の縄文時代遺跡の立地をみると、水との関係をどうしても無視することはできない。栃尾市の河川を見ると、市の北東部、見附市との境界付近で北より塩谷川、刈谷田川、稚児清水川等が掌指状に合流して刈谷田川本流となり西流しているが、遺跡はこれら河川の流域に多く存在している。そして、河川に面した山麓、台地上あるいは扇状地上に、または河岸段丘上に立地しているが、度重なる氾濫のためか、河川の蛇行帯には発見例が極めて少ない。現状では、塩谷川とその支流、刈谷田川の河岸段丘が最も発達している栃堀、菅畑、大倉のほか、塩谷川と刈谷田川の間にある檜出の平地帯などに遺跡が最も集中して検出されている。

このように眼下に河谷を望んだ山麓、丘陵、河岸段丘上、そして近くに飲料水を得るのに便利な地は、また樹木と湿地、氾濫原との地形変換線であり、居住に最適であると同時に、移動路としても適し、かつ狩猟、漁労等食糧や、天然資源獲得に好適の地であったと思われる。したがって、その生活は、自然の支配する地理的環境の中において受動的に形成され、必然的に立地が決定されてきたものであろう。

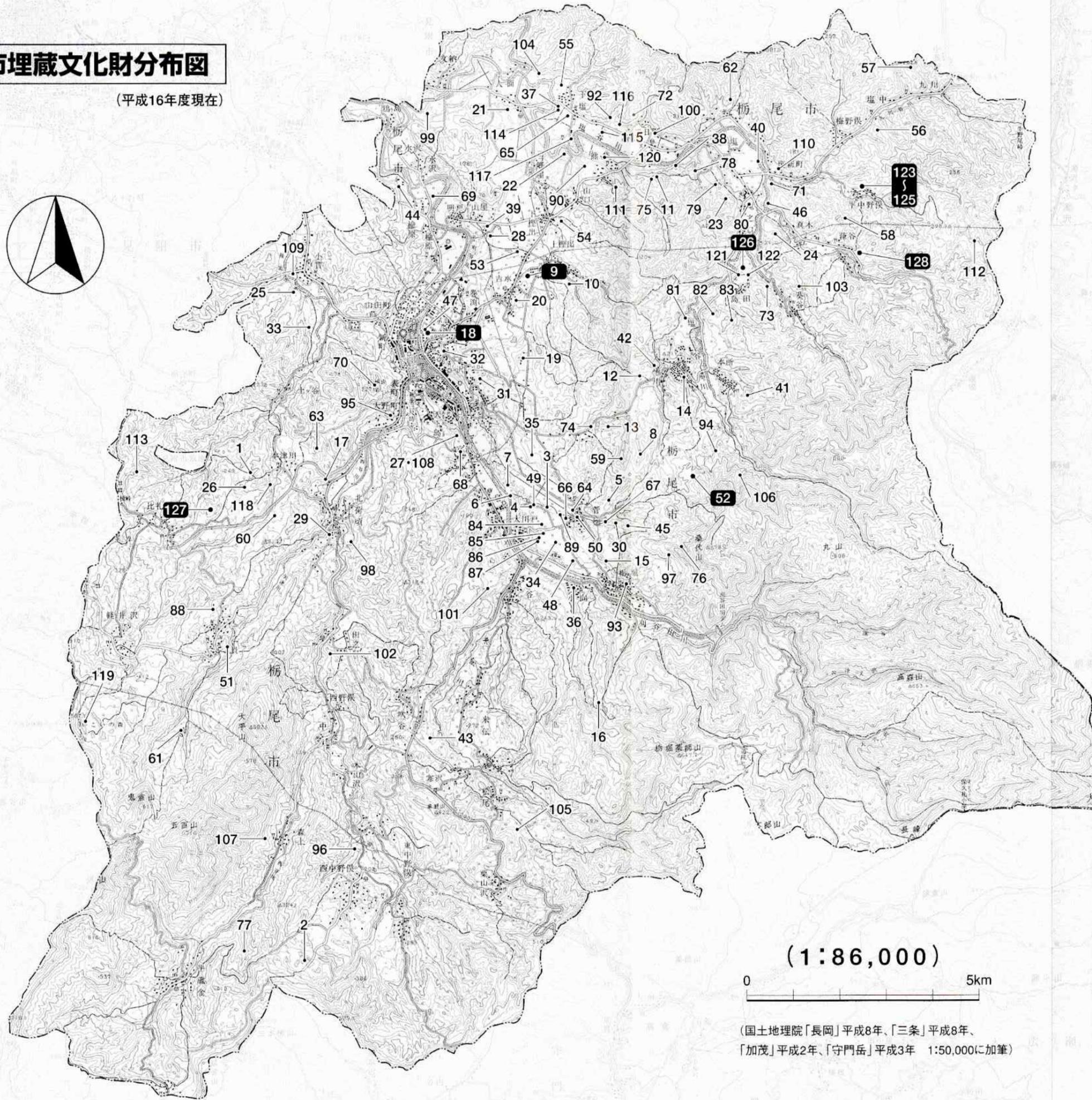
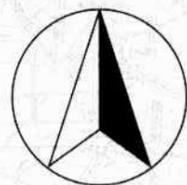
栃尾市内には本報告書刊行時点において128箇所 of 遺跡が数えられる。その時代別分布を見ると、縄文時代の遺跡が82箇所とその大部分を数え、早期から晩期にかけて幅広く分布しているが、その中でも栃倉遺跡や仲崎遺跡などの属する中期から後期が圧倒的多数を占める。その他には、古代から中世の城跡、館跡などが数多く確認されている。弥生時代の遺跡はわずか1箇所が確認されているだけである。

6ページに示す図は栃尾市内の遺跡の分布及び一覧を示したものである。これを見ると縄文時代の遺跡が大部分を占めていることが分かる。以上のことから、栃尾市では縄文時代、特に中・後期において爆発的に人口の増加とその文化の隆盛が見られたことを意味している。その一方、弥生時代になると、赤助遺跡一例の発見にしかすぎない。ここには、栃尾市の縄文時代中期における隆盛と、後期後半から晩期にかけて急激に遺跡が減少していくという現象が読み取れる。

中世に目を移すと、栃尾市内における城館跡は20箇所を数え、ほとんどが南北朝及び室町時代の戦国期に築城されたものと考えられる。いくつかの山城からは防御遺構と思われる畝型阻塞が確認されている。栃尾市の歴史はこれらの城館を中心に繁栄し、この頃から突然はっきりしてくる。この時代に並立した城館も多く、戦国時代の最盛期に古志長尾氏の本城である栖吉城を中核とし、栃尾市では栃尾城を中心として有機的なつながりを持った支城としての機能を果たしていた。栃尾市と接する、見附市の神保町にも当時の山城跡があり、この一例と思われる。栃尾市の城館は全て河川に沿って四方に点在している。これは防備上のため、また、移動、運搬等に河川を利用し、地域開発が河川流域周辺に限定されていたことからであろう。また、城館以外の中世の代表的な遺跡としては上杉謙信と関連する寺院跡とされる、宮沢地内の「瑞麟寺跡」がある。

栃尾市埋蔵文化財分布図

(平成16年度現在)



(1:86,000)



(国土地理院「長岡」平成8年、「三条」平成8年、
「加茂」平成2年、「守門岳」平成3年 1:50,000に加筆)

No.	名称	時代	No.	名称	時代
1	島田	縄文	65	三角B	縄文・室町
2	杜々森	縄文	66	前田(C)	奈良・平安
3	野田	縄文	67	赤助(C)	奈良・平安
4	大川戸北	縄文	68	瑞麟寺跡	室町
5	十二山	縄文	69	岩ノ原の古壘	室町
6	柿ノ木田	縄文	70	栃尾城跡	室町
7	田中島	縄文	71	塩新町城跡	室町
8	堤返り	縄文	72	二日町城跡	室町
9	宮中	縄文	73	大坂の石塔	安土桃山
10	向山	縄文	74	炭田の供養塔	江戸
11	熊袋	縄文	75	熊袋の寺院跡	
12	コヨミ	縄文	76	境沢	
13	法華塔	縄文	77	半蔵金	縄文
14	大フナ	縄文	78	村上B	縄文
15	大岡	縄文	79	上の山B	縄文
16	蔵山	縄文	80	上ハ原	縄文
17	下モ山	縄文	81	下屋敷	縄文
18	金沢(A)	縄文	82	石畑	縄文
19	栃倉	縄文	83	四万沢	縄文
20	吉水	縄文	84	上ノ原A	縄文
21	人面	縄文	85	上ノ原B	縄文
22	幸九郎	縄文	86	上ノ原C	縄文
23	上の山	縄文	87	上ノ原D	縄文
24	野中	縄文	88	増土守	縄文
25	小貫	縄文	89	野田B	縄文
26	菅谷内	縄文	90	熊袋板碑群	室町
27	天下島	縄文	91	梅野侯板碑	室町
28	山屋A(下埋田)	縄文	92	下塩板碑	室町・安土
29	中崎	縄文	93	妙楽寺五輪塔	室町
30	赤助(B)	縄文	94	入塩川石塔	南北
31	崩	縄文	95	栃尾館跡	
32	十三塚	縄文	96	西中野侯城跡	南北(?)
33	土ヶ谷	縄文	97	栃堀城跡	戦国
34	大川戸南	縄文	98	荷頃城跡	南北(?)
35	横吹	縄文	99	落合城跡	戦国
36	小向	縄文	100	二日町館跡	
37	三角A	縄文	101	赤谷城跡	戦国
38	村上	縄文	102	田之口城跡	戦国
39	山屋B(上の原)	縄文	103	山葵谷城跡	戦国(?)
40	塩新町	縄文	104	人面城跡	戦国(?)
41	本所	縄文	105	松尾城跡	南北~戦国
42	仲山	縄文	106	塩川城跡	戦国(?)
43	吹谷	縄文	107	森上城跡	戦国(?)
44	岩野	縄文	108	天下島城跡	
45	赤助(A)	縄文	109	小貫館跡	
46	石倉	縄文	110	塩新町館跡	
47	金沢(B)	縄文	111	虎谿城跡	戦国
48	寺尾	縄文	112	几シ沢	縄文
49	大川戸東	縄文	113	十二沢	縄文
50	前田(A)	縄文	114	三角C	縄文・室町
51	一之貝	縄文	115	丘ノ前	平安・室町
52	仲崎	縄文	116	二日町板碑	安土
53	下堰出南	縄文	117	川原田	縄文
54	下堰出北	縄文	118	倉下城跡	戦国(?)
55	下塩北	縄文	119	八方台(大谷内)	縄文
56	梅野侯	縄文	120	熊袋美沢板碑	中世
57	九川	縄文	121	四ッ割塚	
58	葦谷	縄文	122	大割塚	
59	外野	縄文	123	荒田1号塚	近世
60	門松	縄文	124	荒田2号塚	近世
61	雷	縄文	125	荒田3号塚	近世
62	沖布	縄文	126	四ッ割	中世
63	競馬場	縄文	127	長太郎薬師	近世
64	前田(B)	弥生	128	井田塚	近世

第Ⅲ章 調査の結果

1 仲崎遺跡



1 調査目的

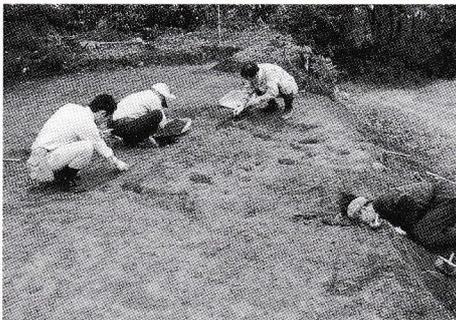
栃尾市大字菅畑及び入塩川地区において、新潟県長岡地域振興局農林振興部が事業主体となり、農免道路整備事業栃尾地区建設計画が進められている。その施工範囲内に周知の仲崎遺跡と隣接する地点があるため、分布調査を経て、平成14年度に当該地点の確認調査が実施された。その結果、縄文時代の遺構・遺物が検出された。しかし、確認調査率が不十分で遺跡の性格が明らかでなかったため補足調査を実施した。

2 調査地

栃尾市大字入塩川仲崎遺跡（遺跡番号52）

3 遺跡の立地

標高346mの山地。刈谷田川流域では、最高地点に存在する遺跡である。背後には、400mほどの山頂を控えており、最も奥深い地域に存在する遺跡のひとつといえる。遺跡は、小支谷の起点（源流）付近にあたり、崖線沿いには湧水が認められる。



作業風景（遺構発掘）

4 調査面積 131㎡

5 調査方法

今回の確認調査では、対象地が狭小であったため施工範囲全域を調査した。重機で慎重に表土を掘削した後、人力で遺物包含層を掘削し、地山上面で遺構精査を行った。その結果、竪穴住居・土坑・ピット等の遺構が検出されたため、適宜、記録作業を行いながら遺構覆土を掘削した。

6 調査成果

(1) 基本層序（第4図・左下）

調査範囲内の基本堆積は、おおむね変化がみられない。

I層：黒褐色土（表土。しまりの弱い腐植土。層厚15～30cm。）

II層：茶褐色～暗褐色土（遺物包含層および遺構覆土でしまりが強く、粘性やや強い。直径5mmほどの炭化物を

ごくまばらに含む。層厚5～10cm。)

Ⅲ層：橙色土（ローム質の地山。しまり・粘性ともに強く、礫をまばらに含む）。

(2) 遺 構 (第2・3・4図)

調査範囲は山林であったため木の株が地山深くまで入り込んでいる箇所が多々みられた。したがって基本的には覆土の硬さ（しまり具合）、炭化物の混入等から遺構を判断したが、判別が困難なものは遺構と判断して調査した。覆土は、炭化物を含む褐色土の単層から構成されるものが大多数であるが、フラスコ状土坑のみは黒色土を基調としていた。検出された遺構は、竪穴住居1軒、土坑3基、ピット16基（竪穴住居およびその周辺は除く）である（第2図）。

【竪穴住居】(SI1)

掘り込みの浅い竪穴住居1軒を検出した。緩斜面地に立地しており、標高の高い北側半分のみ最深部で0.1m程度の浅い掘り込みが検出された。これは、元来このような構造であるかは明らかでなかった。残存部分からは、直径3mほどと小さな円形プランと考えられるが、小ピットの凹凸が四角形を描いているようにも見えることから、方形基調の可能性もある。床面は凹凸が激しく、浅い小ピットが多数存在するため支柱穴の把握は困難であるが、9カ所のピットについては、深さ0.2mほどと柱穴と認識するのに一定の深さを有していた。このうち5基（スクリーン貼付）が掘り込みの中央に位置する地床炉の周囲に配置されており均整のとれた五角形をなすことから、支柱穴となったものと考えられる。なお、地床炉は、直径35cmほどの円形をなし、地山が受熱により赤化しているもので、関連施設等は認められなかった。

【土 坑】

SK1 竪穴住居の南西隅に重複するように検出された、いわゆるフラスコ状土坑であり、開口部径0.7m、底部最大径1.2m、深さ1mほどを測り、底部に5cmほどの段差（テラス）が設けられている。覆土は他の遺構と異なるしまりの弱い黒色土であった。セクションの観察からは、竪穴住居覆土の下部から検出されており、竪穴住居より古く位置づけられる。覆土中からは中期前葉の土器等が多数出土した。中でも完形の河童形土偶が奥まった底面近く（東隅）

から出土したことは特筆される。なお、切り合い関係にある竪穴住居とSK 1では、出土土器から新旧を判断することはできなかった。

SK 2 竪穴住居の北側に位置する。東側は既存の農道建設時に損壊しているが、残存部分の規模は直径1.8m、深さ0.15～0.2mを測る。覆土上部からは、中期前葉の深鉢の底部と剥片が出土している。

SK 3 竪穴住居の南西に単独で存在した。規模は、長径1.5m、短径1.1m、深さ0.2mほどである。土坑の中心部に地山土の堆積が認められ、プランがドーナツ状に検出された。これは倒木による地層の逆転現象と考えられる。

【ピット】

ピットは直径0.15～0.5m、深さ0.1mほどであり、覆土は竪穴住居等にも認められる暗褐色土である。したがって、その多くは遺構と認定できるが、一部は木の根による攪乱の可能性もある。また、直線上に数基が連続的に分布するものもあるが、調査範囲が狭小なこともあり、有意な配置を積極的に評価することはできなかった。

(3) 出土遺物 (第27・28図)

縄文土器103点、土偶1点、石器12点が出土した。そのほとんどは、フラスコ状土坑および竪穴住居の覆土から出土したものである。包含層の遺物は、単発的に出土したのみである。

土器は、縄文時代中期前葉(新崎式段階)の資料であり、遺跡の主要な帰属時期を反映しているものと考えられる。また、前期前半の羽状縄文系土器がみられたが、これは県内でも稀少な事例であり注目される。

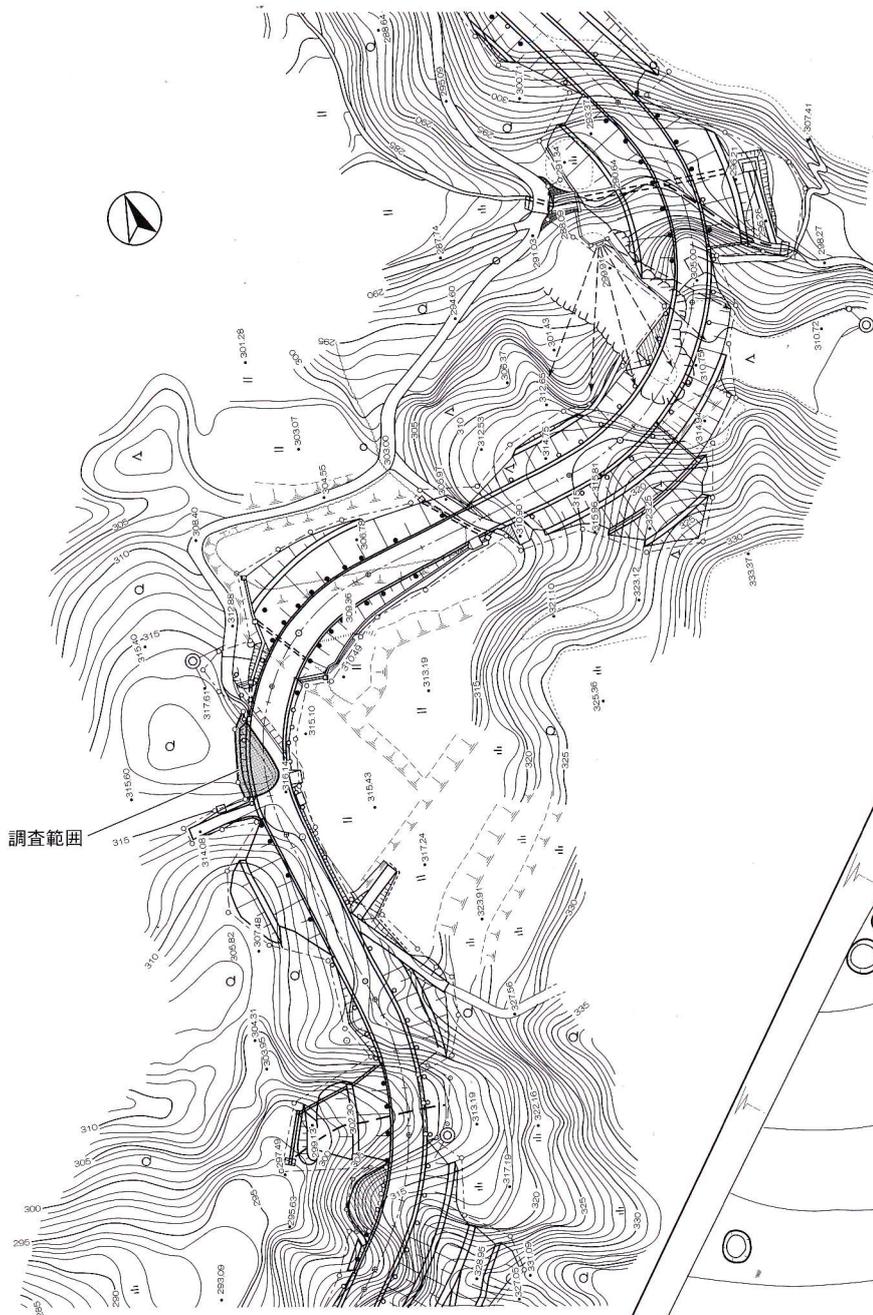
フラスコ状土坑の底部から出土した「河童形土偶」は、欠損がほとんどみられない完形品である。表現が簡素化されているものの、妊婦を象ったものと考えられ、腹部の膨らみと縦方向の貫通孔(産道表現か)が認められる。また、土偶が遺構内から出土するケースは稀であり、その意味を検討する上でも重要な資料といえる。

7 まとめ

今回の調査をとおして、仲崎遺跡が縄文時代中期前葉の集落跡であることが明らかになった。遺跡の中心は、調査範囲東側

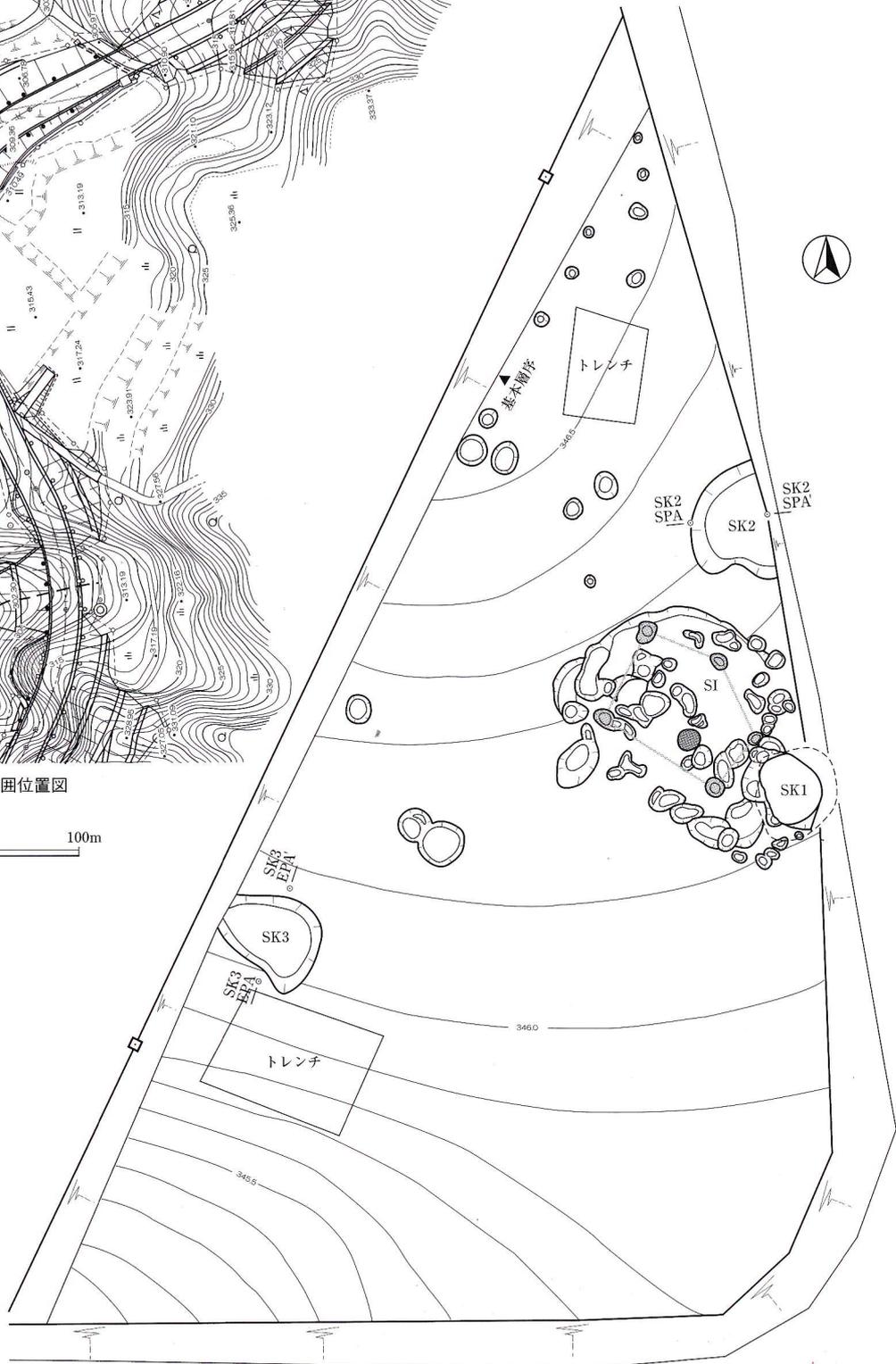
にあったことが推測され、ほ場整備以前には地元の研究家、故・嘉代善治氏（大字入塩川）により多数の遺物が採集されたという。しかし、ほ場整備および農道建設時の大規模な掘削により、遺跡の大半は滅失しており、残存部分も今回の調査で完掘した。遺跡は、西側にわずかに延伸することが予想されるが、遺構の広がりや遺物の分布密度を勘案すると中心部とは考えにくい。

また、標高400mほどの山頂を背後に控えた小支谷の湧水地という立地条件は特徴的である。栃尾市街地から険しい山道を経た山中のわずかな平坦地に立地しており、盆地（平坦地）に存在する拠点集落との関係を考える必要がある。市内には、同様の立地状況が杜々の森遺跡等にも認められ特徴的である。先史時代の社会構造を考える上で多くの情報を有する研究上重要な地域と考えられる。



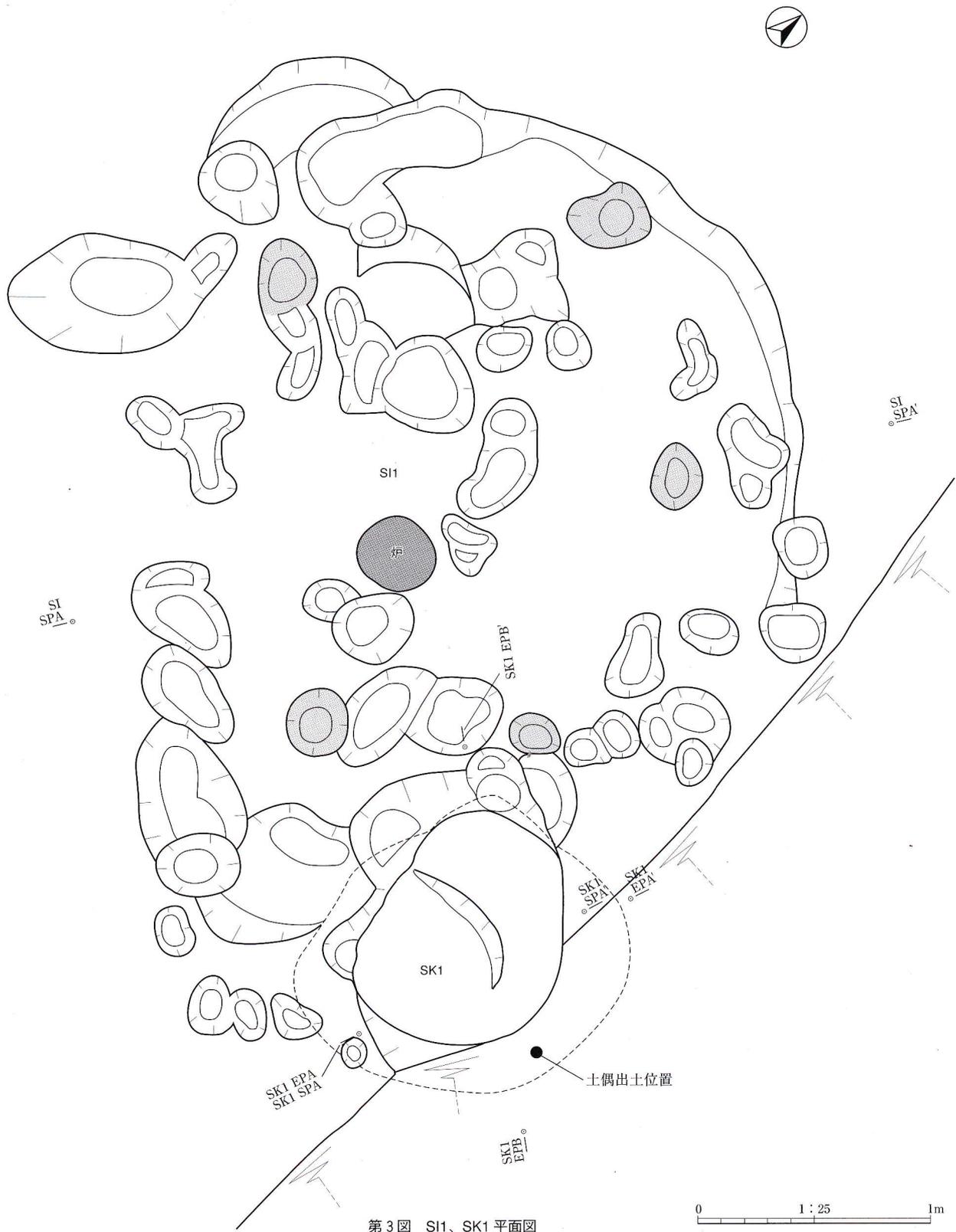
第1図 調査範囲位置図

0 1 : 2000 100m

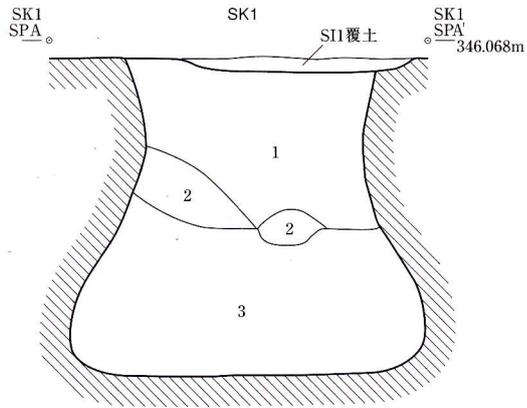


第2図 遺構平面図

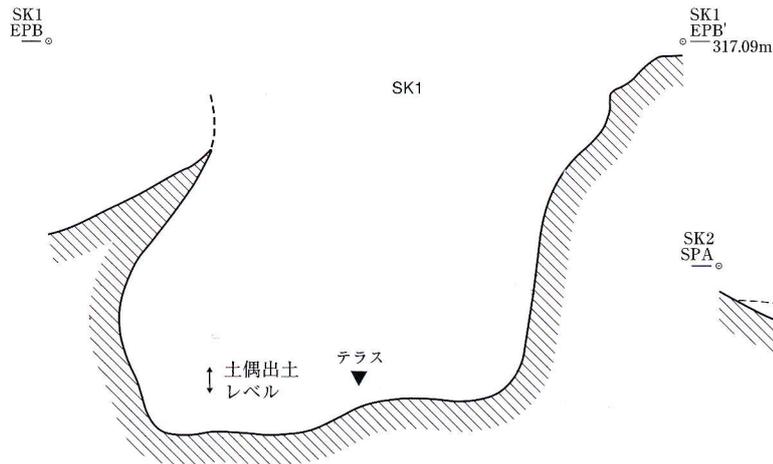
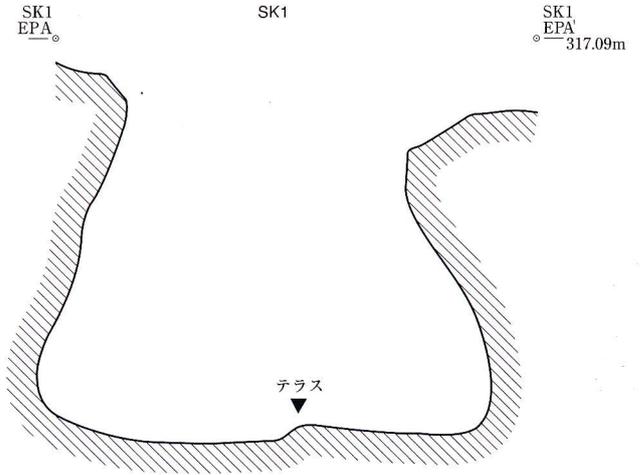
0 1 : 100 5m



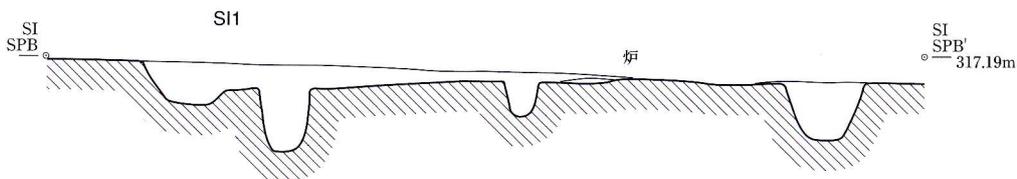
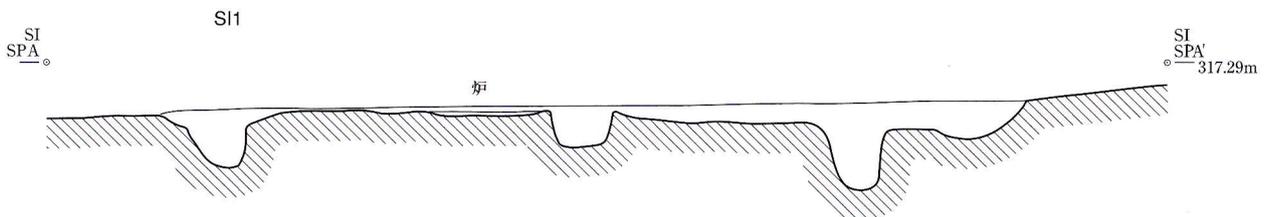
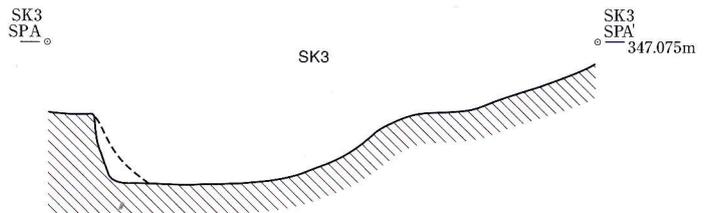
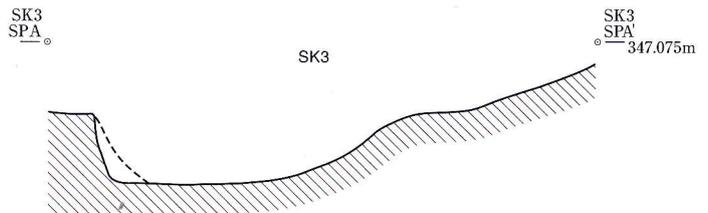
第3図 SI1、SK1 平面図



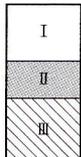
- 1: 暗褐色土 φ10mmの炭化物・地山粒子まばら
- 2: 黒褐色土 φ10mmの炭化物まばら
- 3: 暗褐色土 φ10mmの炭化物・地山粒子まばら、しまり弱い



- 1: 暗褐色土 しまり弱く、粘性弱い
- 2: 茶褐色土 しまり強く、粘性強い

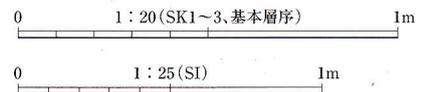


基本層序



第4図 遺構断面図

覆土: 茶褐色土 (φ5mmほどの炭まばら、地山ブロック多量)
 炉: 赤褐色土





1. 仲崎遺跡 近景 (南東から)



2. 仲崎遺跡 近景 (北東から)



3. 仲崎遺跡 基本層序 (南東から)



4. 仲崎遺跡 調査区完掘 (北から)



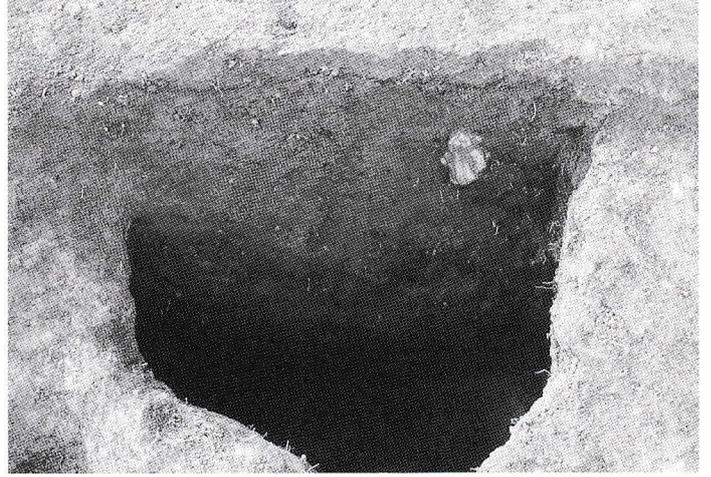
5. 仲崎遺跡 SI1 完掘 (東から)



6. 仲崎遺跡 SI1 完掘 (北から)



7. 仲崎遺跡 SI1 地床炉検出 (西から)



8. 仲崎遺跡 SI1 断面 (東から)



9. 仲崎遺跡 SK1 完掘 (南東から)



10. 仲崎遺跡 SK1 完掘 (西から)

2 宮中遺跡



1 調査目的

栃尾市大字上檜出地区において、栃尾市が事業主体となり、市道上檜出2・4号線改良工事が計画された。その周辺には周知の遺跡である宮中遺跡が存在する。平成11年度に分布調査し、平成12年に確認調査を行った結果、縄文時代の土坑、ピット等の遺構および遺物が検出された。また、平成15年度には、狭小な未調査範囲が存在したことから工事立会を実施した(第5図)。

2 調査地

栃尾市大字上檜出字宮中2001-3ほか 宮中遺跡(遺跡番号9)

3 遺跡の立地

国道290号線から西に、県道入塩川・上檜出線より南にそれぞれ250mほど離れた上檜出集落の西側沖積水田に張り出した小台地の先端部にあたる。現状は主に宅地及び畑地となっており、標高は約86mから91mを測る。調査地北部に隣接する現有道路は上り斜面となっており、地形的に道路部分を切り開いている。北部調査地は道路の東側の上面にあたる。南部調査地は現有道路面とほぼ同じ高さにあたり、ほぼ平坦地となっている。

4 宮中遺跡について

宮中遺跡は上檜出遺跡として古くから知名の遺跡である。土器や土偶、土版、三角土製品、石器では石鏃、石斧、石皿等が表面採集され、縄文時代中期及び後期の遺跡として知られている。遺物は長岡市立科学博物館や当市の故考古学研究者宅に保管されている。『栃倉』(栃尾市教委1961)では三角形土製品で乳房状の突起を持つものや、刺突と沈線を持つものが紹介されている。また、『新潟県史蹟天然記念物調査報告書第7輯』(齋藤1937)や『新潟県史通史編1』(新潟県1983)にも記されている。『新潟県史資料編1』の図版では、土偶三角形土版、三脚石器、大珠等が記載され検出遺物の多様性を物語っており、遺物から規模の大きな集落遺跡の可能性も含んでいる。

5 調査面積 確認調査：38.3㎡



宮中遺跡(表土除去状況)

6 調査結果

(1) 土 層

基本層序は次のとおりである。Ⅰ層は暗褐色土の表土、Ⅱ層は暗褐色土でしまりがややある。Ⅲ層は暗褐色土に黄褐色土が斑点状に混じる。しまりがよい。Ⅳ層は黄褐色土の地山面である。1、2 Tでは地山を含む盛土が見られ、2、3 TにかけてはⅡ層がとばされており、南に向かうほど地山面までの深度が浅いことから、この一帯は南側を削り取り、北側に盛られたものであろう。車庫移動の両脇壁であるb地点は車庫設置の際、土層が改変されている。4 TでもⅡ層が存在しないことから、北部の工事計画予定地はすでに上面が削平されている。南部の工事計画予定地については、6 T中央部から6 T南側にかけてⅡ層が見られず、ここも上面が削平されており地山面まで浅い。遺構はある程度残存している。7 T南端及び8 Tは消防小屋設置による盛土がなされており、8 T盛土には径20~30cmほどの自然礫が多く含まれている。1 Tから7 Tにかけての土層は全てシルト質土であり、8 TⅢ層は粘質土となっている。今回の調査地全体にかけて上面がすでに削平されている箇所が多く見られる。土層中の検出遺物は8 TⅡ層から縄文土器片が1点検出されただけで、遺物包含層は認められない。

(2) 遺 構 (第6・7図)

事前に1 Tと現有道路間の法面の清掃を行った際、壁から土師器1点が検出された。よって1 Tを広げa地点として掘削したところ、法面壁際で地表下70cmの所から径1~3cmの炭化物が混じった灰褐色土が径40cm程度、深さ10cmくらいの範囲で認められた。このa地点からは肥料のほか、アルミホイル、ガラス片、針金が検出された。これらのことから事前法面清掃の際、発見された土師器はゴミと一緒に廃棄されたものであろう。2 Tからは性格不明遺構とピット1基ずつが確認されたが、ともに覆土からは近現代の陶磁器片しか検出されておらず、遺構もこの時代のものと考えられる。3~5 T及びb地点からは遺構は確認されない。6 Tでは土坑3基、ピット11基、7 Tでもピット11基が確認された。6、7 Tは地山面まで浅く、畑作の影響で植物根の痕跡が多く認められる。中には地中深くまで根を張る作物もある。P 2、3、5、9、11覆土には根痕が多く見られる。P 1、4、6、10は約2 m間隔で一列に並び、覆土はしまりが全くなくボン

ボソしており、4基のピットとも覆土中に木屑が見られる。遺物は認められないが、P4からだけ小粒の自然礫が多く認められた。状態からこれらの小穴は最近まで使われたものであり、聞き取りからはざ木跡とも考えられる。SK1～3、P7の覆土は他のピットに比べ状態が良く、しまりが良い。SK1とP7は土層には見られない黒褐色土が混入しており、埋土状況も人為的な面が見られる。他の土坑と比べ深度も深い。また、共に全体像は掴むことはできないが、底部分は片側に半円を描き、突き出ている。現段階では覆土からの出土物はない。SK2、3は上面が切られているものと考えられ、深度は浅いが、両土坑の覆土から縄文土器片が1、2点検出された。状況から6Tではこれら4基の土坑、ピットが縄文時代の遺構と考えられる。7Tではピット状の小穴が11基確認されたが、いずれも覆土は単層でⅢ層か暗褐色土に地山粒が混入しているものに限られる。全て覆土にしまりがなく、遺物も認められない。遺構と決定づける明確なものは何もない。8Tでは3基のピットが検出された。P1は浅く、Ⅲ層が染みこんだものと思われる。P2、3の覆土もⅢ層粘質土のため、しまりが無い。共に覆土から各々若干の縄文土器片が出土したが、ピットの性格は明らかではない。遺構と考えられるものが検出されたトレンチは6、8Tに限られる。この地点の調査は法線内に限り行ったため、調査範囲が狭く、全体像を把握できない遺構もあり、各遺構の位置付けや相互関係は不明である。

また、平成15年に実施した工事立ち会いでは、工事掘削深度まで重機および人力で表土除去した結果、遺構確認面に達した。精査すると、フラスコ状土坑1基およびピット2基が検出されたため、半截、記録の後に完掘した。特にフラスコ状土坑の残存状況は良好であった。検出された規模は直径1.8m、深さ0.4mを測る。遺物包含層が残存しなかったことから、土坑の上部は欠失している可能性が高いが、深度の浅いピットが残存していることを勘案すれば、本来の規模と大きく相違しないと考えられる。覆土は黒色土が主体で、壁面付近には地山基調の崩落土が堆積していた。

(3) 遺物 (第29図)

事前の法面清掃時に壁から1点の土師器片が検出された。奈良平安期の所産で、ロクロ成形による碗の体部もしくは小型壺の胴部片である。他に同時期の遺構や遺物が検出されな

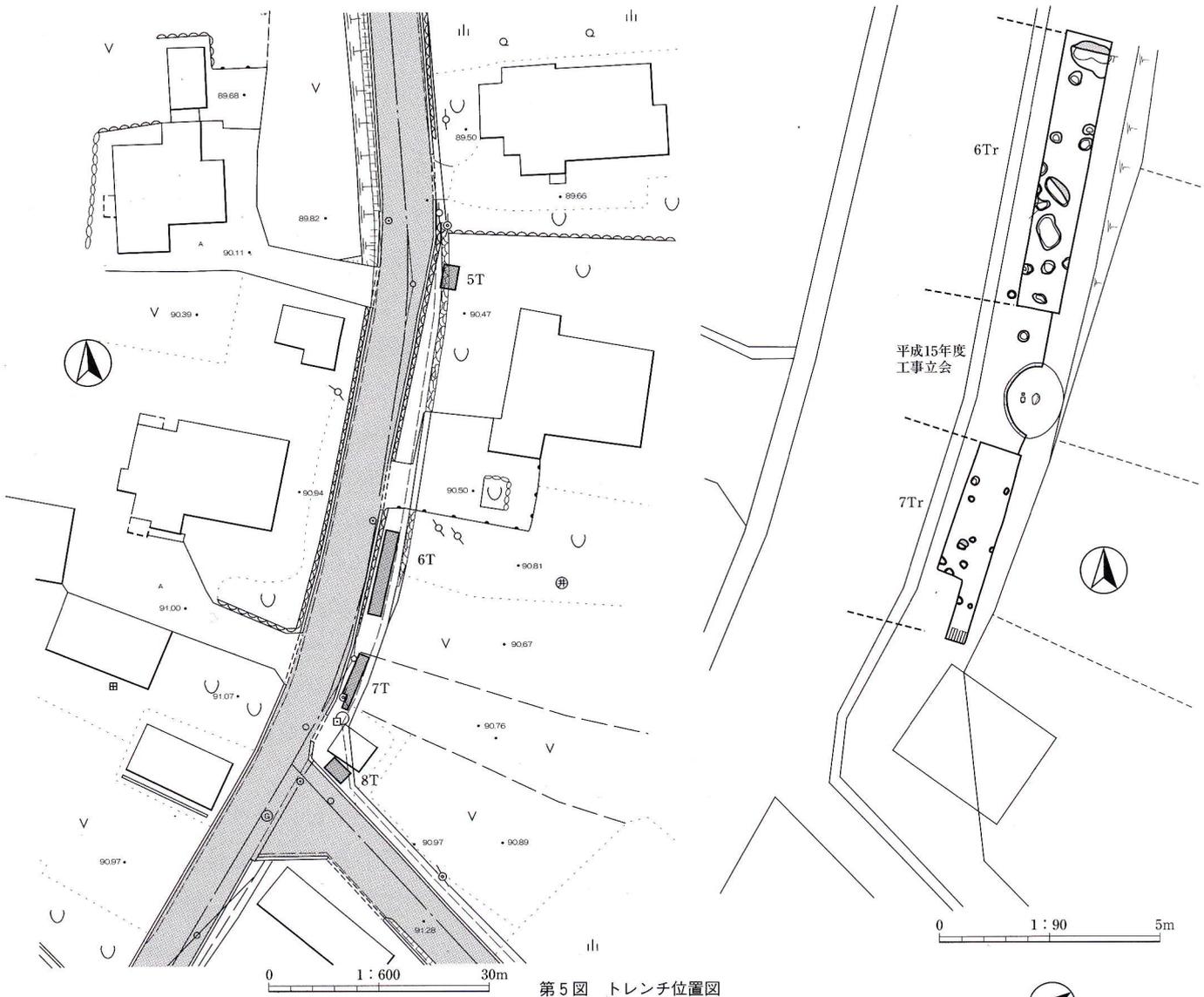
いこと、土師器の出土地点に現代の廃棄物が確認されたことから、他のものとともに投棄されたものと考えられる。今回の確認調査では縄文土器片が8点検出された。6 T表面採集と8 T II層から各1点のほかは全て6、8 Tの遺構覆土からの出土であり、縄文土器は調査地区の南部6、8 Tにしか見出せない。また、中期中葉の大木8 b式に相当する深鉢胴部片が検出された。半截竹管で渦巻きを描き、綾杉状の沈線が施文されており、6 T・SK 3から検出された。その他、中期最終末から後期初頭にかけての隆帯文が施された土器の口縁部が検出され、刺突や条線が見られる。出土地点は8 T・P 2覆土内からである。また、縁帯文が巡る後期前葉の南三十稲場式土器の口縁部が検出され、出土地点は8 T・P 3である。以上土器片3点から時期は縄文時代中期中葉から後期前葉にあたり、以前の下水道工事立会調査及び分布調査とも符合する。

また、平成15年に実施した工事立会では、フラスコ状土坑底面のほぼ中央からは扁平礫が、それと隣接する位置（底面から若干浮いた状況）からはコップ形の縄文土器（第29図1）が完形の状態で出土した。

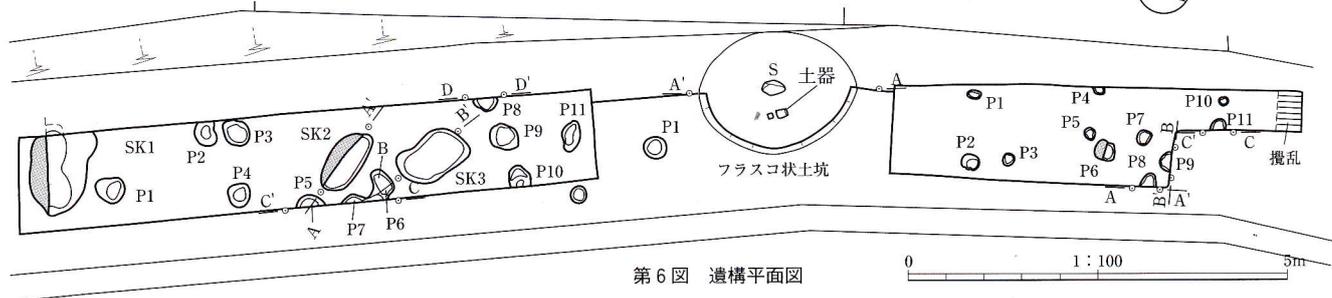
出土土器は縄文時代中期後葉から後期のものと考えられ、縄文（原体RL）が全面に施される。また内面下半には、朱色の付着物が認められた。彩色に利用されるベンガラ（酸化鉄）の保管あるいは調合に用いられた容器と考えられる。土坑の性格を考える上でも重要な資料といえる。

7 ま と め

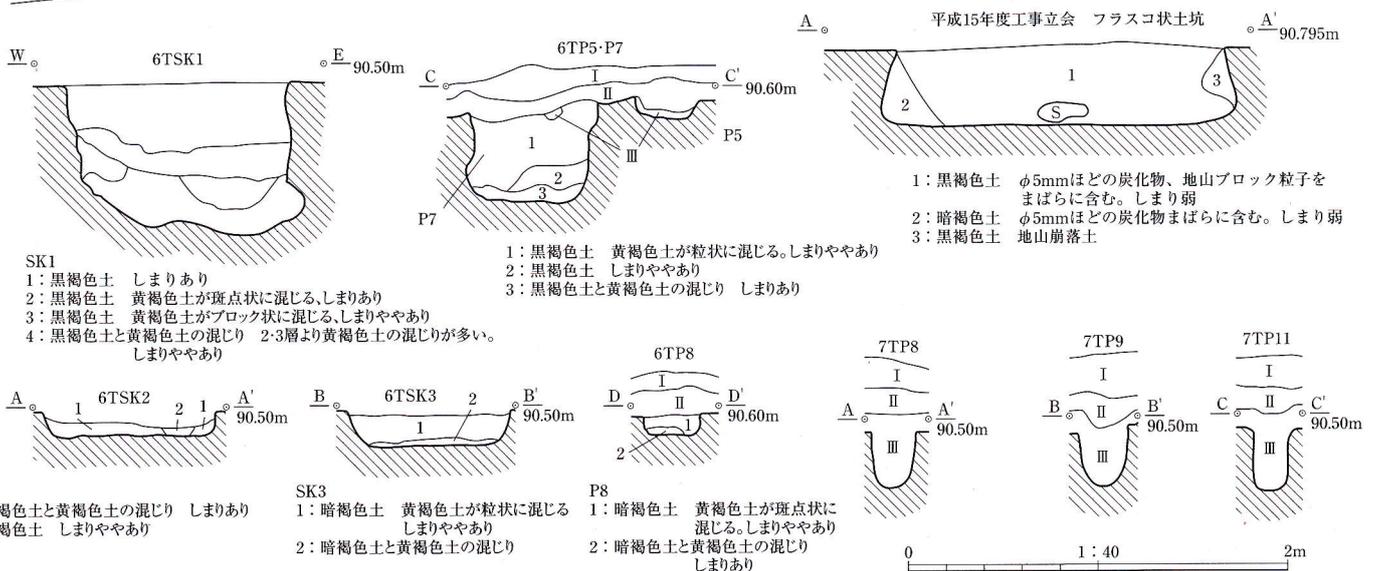
宮中遺跡の確認調査および工事立ち会いにおいては、縄文時代の遺構が多数検出されている。過去の表面採集資料の質量や今回の調査の結果を踏まえれば、比較的規模の大きな集落跡が良好な状態で残存するものと考えられる。



第5図 トレンチ位置図



第6図 遺構平面図



第7図 遺構断面図



11. 宮中遺跡 (断面)



12. 宮中遺跡 (完掘)



13. 宮中遺跡(工事立会) フラスコ状土坑断面 (東から)



14. 宮中遺跡(工事立会) フラスコ状土坑断面 (東から)



15. 宮中遺跡(工事立会) フラスコ状土坑完掘 (北東から)



16. 宮中遺跡(工事立会) フラスコ状土坑完掘および遺物出土 (東から)

3 四ツ割遺跡



1 次調査（試掘調査）

1 調査の目的等

新潟県主体による上塩地区中山間地域総合整備事業計画が明らかになり、平成13年度より栃尾市農林課と協議を開始した。事業内容は農業用排水施設や圃場整備・暗渠排水等の農業生産基盤整備、営農飲雑用水や農村公園等の生活環境基盤整備である。この中に島田^{しまだ}地内で圃場整備（島田）が計画されており、平成14年4月19日～26日にかけて遺跡分布調査を実施した。関連機関である栃尾市農林課や上塩地区中山間地域総合整備事業推進委員会と協議のうえ、今回試掘調査を実施することとした。

試掘調査地は既に整地され表面上は確認できないが、大塚、五りん塚が存在した地点で未周知の遺跡が存在する可能性がある。この度の調査はこの地点について遺跡試掘調査を実施し、遺跡の有無を明らかにし今後の協議に資することを目的とした。

2 調査地

栃尾市大字島田^{よわり}字四ツ割68-丙ほか

調査地は東西の山並みの谷間に流れる塩谷川^{しおたに}右岸に位置する。塩谷川の蛇行に沿った段丘上に広がる水田地帯の一角で標高は約130m前後を測る（第8図）。

3 調査面積（別紙「調査図」参照）

- ・工事全体予定面積 約160,000㎡
- ・今回試掘調査面積 173.6㎡

4 調査方法

遺跡分布調査時の聞き取り調査をもとに、既に消滅した塚が存在していたという地点及び八兵衛屋敷推定地周辺にトレンチを設定して調査にあたった。

5 調査結果

(1) 基本層序：

層序は1・2 Tで既に地形が改変されている土層のため3 Tを基本にⅠ層褐色土、Ⅱ層暗褐色土、Ⅲ層褐灰色土、Ⅳ層



四ツ割遺跡（試掘風景）

黄橙色土、V層青灰色土とした。1 Tでは褐灰色土に橙色土と灰色土が混じる盛土が上面に見られる。2 Tは既に上面が切られており、北側の一部には押し込められた盛土が一部認められる。3 TもI・II層が浅く上面が切られた可能性が高い。基盤層には植物根の痕跡が多く残る。

全体的に地形は旧来の原形をとどめておらず、遺物包含層は認められない。

(2) 遺物

近世陶磁器片が検出された。碗の口縁部片等3点で表面下45cmの深さ、暗褐色土中から発見された。その他の遺物の出土は認められない。

(3) 遺構 (第10図)

過去に存在した塚推定地を含み南北に試掘坑を設定したところ、トレンチ北側の遺構確認面で溝1条が検出された。この溝について消滅した塚の周溝の可能性もあるため、トレンチをさらに北側に延ばし、西にもトレンチを広げた。その結果、溝は塚が存在したという箇所周りには巡っていないことが判明した。溝は遺構確認面から掘り込まれ、溝幅は70～180cm位である。

6 まとめ

全体的に土層は大きく改変されている。溝1条が検出されたが、消滅した塚との相互関係は見当たらない。この溝の時代を特定するものは確認されなかった。

その他、消滅した塚の痕跡や塚に関係する遺構や遺物を見出すことはできなかった。

2次調査 (試掘調査)

1 調査目的

栃尾市島田地内において総合整備事業 (圃場整備、農業生産基盤整備、生活環境基盤整備) が計画されている。事業地内に周知の遺跡は存在しないが、かつて塚や屋敷が存在したという伝承に基づき、平成14年8月21日～23日に試掘調査が実施された。その結果、遺構が検出されたものの、内容とその広がりが不明確であったため、試掘調査を補足することとした。

2 調査地 栃尾市大字島田字四ッ割68-丙

3 調査面積 80㎡

4 調査方法

調査範囲内に任意のトレンチを設定し、重機による掘削、人力による精査を行い、遺構・遺物の有無を確認した。その後、土層堆積状況、トレンチ位置などを図化した。

5 調査成果

(1) 基本層序 (第9図)

- I層：褐色土（表土）
- II層：暗褐色シルト
- III層：褐灰色シルト
- IV層：黄橙色シルト
- V層：青灰色シルト
- VI層：黄褐色砂質シルト
- VII層：黄褐色シルト
- VIII層：明灰褐色シルト

(2) 出土遺物

出土遺物は認められなかった。

(3) 遺 構 (第10図)

前回調査で検出された溝状遺構を中心にトレンチを設定した。その結果、棚田造成時に周辺が大きく削平されていることが明らかになった。一方、盛られた部分からは遺構が検出された。遺構覆土は、盛土部分のみで残存した土層（包含層相当層？、2次調査II層、3次調査黒色シルト層）を基調とするものである。検出された遺構は、溝1条、土坑2基、柱穴11基である。このうち柱穴には有意な配列が認められることから、掘建柱建物あるいは杭列を構成した可能性を指摘できる。遺構の年代については、出土遺物がないため明らかでないが、覆土のしまり具合、構成から判断すれば、現代の攪乱等ではない。また、調査対象範囲内にはかつて塚が存在したとされ、相互の関連性が想定される。塚の年代を積極的に評価すれば、中世～近世の遺跡である可能性が高いものと考えられる。

6 まとめ

・中世～近世の遺跡が存在するものと考えられる。しかし、棚

田の造成時に旧地形が大きく改変されており、遺跡は盛土部分のみに残存し、切土部分では滅失していた。遺跡の存在は、さらに東側に延伸していることが予想され、ほ場整備前に再度確認調査が必要である。

- ・埋蔵文化財包蔵地として周知化の手続きを進め、事業者から文化財保護法57条の3（埋蔵文化財包蔵地における土木工事等の通知）の提出を求める必要がある。
- ・当該範囲の工事は、現在の計画では、ほとんど掘削が及ばないこととなっている。遺跡の存在が確認された深度は地表下50cmほどであり、30cm以上の保護層を確保できると判断される。工事設計図と照合して、現在の計画のままであれば本発掘調査の必要はない。ただし、工事立ち会いは必要となる。

3 次調査（確認調査）

1 調査目的

栃尾市大字島田地区において、新潟県長岡地域振興局農林振興部による農業基盤総合整備事業（ほ場整備、農業生産基盤整備、生活環境基盤整備）が計画されている。事業地内には、平成14、15年度の試掘調査によって周知化された四ツ割遺跡が存在する。今回の調査地は、事業計画では掘削が及ばない範囲であるが、遺跡の広がりを確認するため、調査を実施した。

2 調査地

栃尾市大字島田字村下モ346-甲ほか 四ツ割遺跡（遺跡番号126）

3 調査面積

41.6㎡（1.6m×7mのトレンチ2箇所、1.6m×4mのトレンチ3箇所）

4 調査方法

調査範囲内に任意のトレンチを設定し、重機による掘削、人力による精査を行い、遺物、遺構の有無を確認した。その後、土層堆積状況、トレンチ位置などを図化した。

5 調査結果

（1）基本層序（第9図）

- I層：褐色土（表土）
- II層：暗褐色シルト
- III層：褐灰色シルト
- IV層：黄橙色シルト
- V層：青灰色シルト
- VI層：黄褐色シルト
- VII層：明灰褐色シルト

(2) 出土遺物

出土遺物は認められなかった。

(3) 遺構（第10図）

前回の試掘調査で検出されたものと同様のピットが、7トレンチから11基、8トレンチから9基検出された。数が多く、有意な配列もうかがえることから、掘建柱建物あるいは杭列を構成した可能性を指摘できる。遺構の年代については、出土遺物がないため特定することはできないが、遺構確認面・遺物包含層相当層より上位から18世紀前半の伊万里焼の陶片が1点出土している。したがって、遺構の年代は、少なくともこれより古く位置付けることができる。

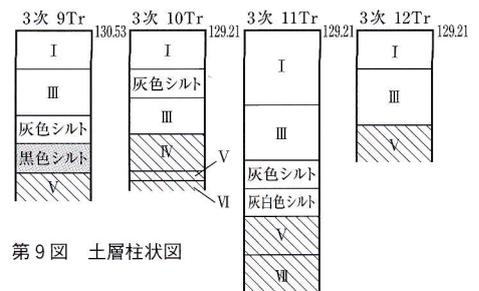
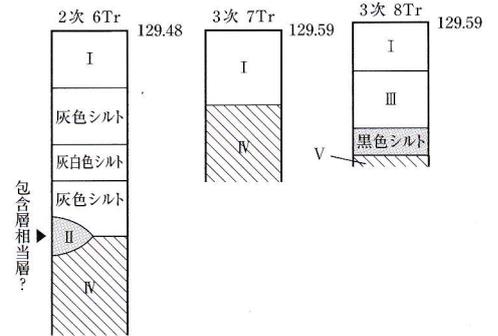
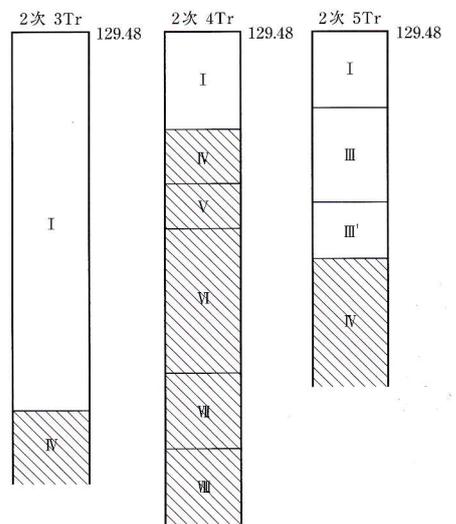
前回並びに今回の調査によって、検出された遺構と、かつてこの区域に塚や屋敷があったという伝承との関連性がより一層うかがわれる結果となった。

6 まとめ

今回の調査では、前回調査で予想された四ツ割遺跡の東側への広がりが確認され、遺跡範囲を特定することができた。そのため、遺跡範囲の修正が必要である。なお、四ツ割遺跡の範囲では、掘削を伴わない工事計画であり、事業実施にあたって支障はないが、工事の際には埋蔵文化財専門職員の立会調査が必要である。



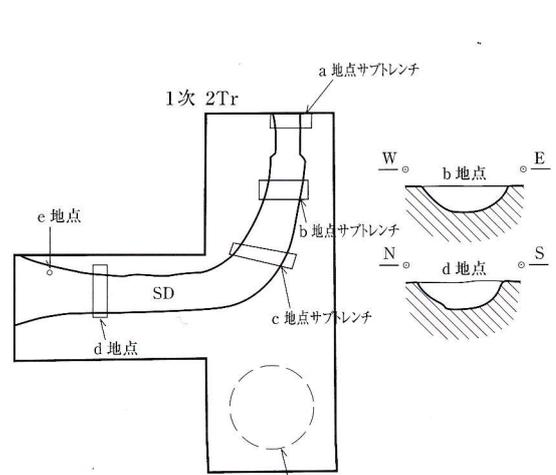
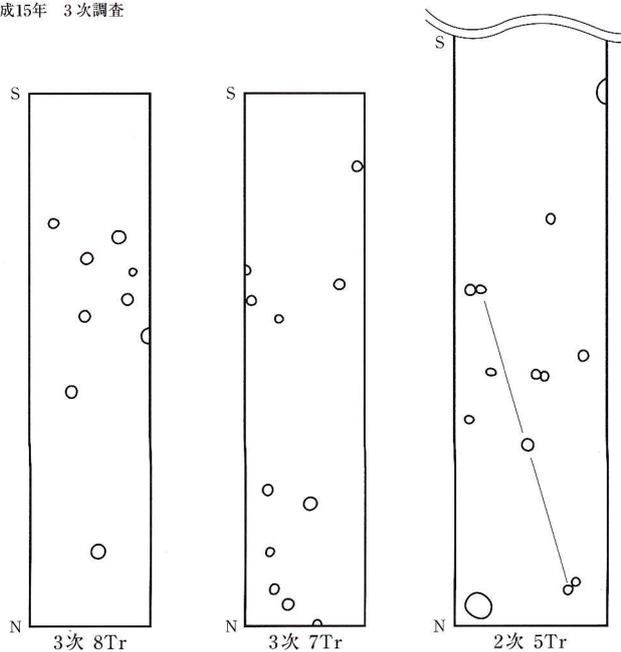
第8図 トレンチ位置図



第9図 土層柱状図

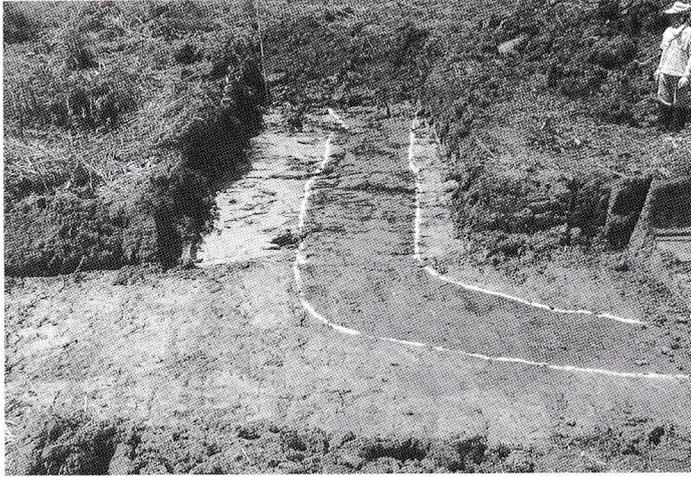
0 1:200(柱状図) 1m

- 平成14年 1次調査
- 平成15年 2次調査
- ▨ 平成15年 3次調査



第10図 遺構平面図・断面図

0 1:100(遺構分布図) 5m
0 1:50(遺構断面図) 2m



15. 四ツ割遺跡(1次) SD検出 (東から)



16. 四ツ割遺跡(1次) 2Tr SD d 地点断面 (西から)



17. 四ツ割遺跡(3次) 7Tr 断面 (南から)



18. 四ツ割遺跡(3次) 7Tr 遺構検出 (南から)

4

平中野俣塚群(荒田1号塚・2号塚・3号塚)



1 調査目的

栃尾市による道路改良事業のうち、栃尾市大字平中野俣地内で市道平中野俣線改良工事が計画されている。工事計画地周辺には周知の遺跡はないが、平成14年11月18日～21日にかけて遺跡分布調査を行い、2地点からそれぞれ縄文土器片1点と塚状遺構群3基が検出された。これらの地点については工事の事前に試掘調査を実施することとし、分布調査報告書の今後の取り扱いの項に示した。栃尾市建設課と協議のうえ、これらの地点については当初平成15年度に試掘調査を行うこととしたが、このうち塚状遺構群の地点周辺は急遽平成14年冬に立木の伐採を重機で行うこととなり、その際、塚状遺構も破壊される可能性があるため、この度緊急に試掘調査を実施し遺跡の有無を明らかにし今後の協議資料を得ることを目的とした。

2 調査地

栃尾市大字平中野俣字荒田1959-6ほか

3 調査地の立地

山間の東西方向に平中野俣川が流れ、河川右岸段丘上には水田が川に沿って沢状に広がる。その水田のたもとまで北側の山々の斜面がぶつかる。調査地はその最南部のゆるやかな斜面上にあたり、現況は山林で標高は120m前後を測る(第11図)。



平中野俣塚群(作業風景)

4 調査面積

当該市道整備事業工事全体予定面積 約9,200㎡

(うち立木伐採工事予定面積 約600㎡)

調査面積	1号塚	16.32㎡	2号塚	9.14㎡
	3号塚	13.53㎡	合計	38.99㎡

5 調査方法

現場調査に入る前、現況の地形平面図作成のため地形測量を業者に委託し、平成14年12月6日調査地付近について測量を実施した。12月9日からは1～3号塚の順に表面清掃後、全て人力により掘削した。12月9日からは降雪となり、特に12月11日・12日は1日中大雪で調査地の除雪作業のほか、シートを塚状遺構の上面に張り調査にあたった。積雪も多くなり、根雪と

なる状況と判断し、調査を有効に、かつなるべく早急に終了するように努めた。各塚ごとに表土剥ぎを行った後、半割し基底部と思われる土層まで掘り下げたが、土層状況を的確に把握できなかったため、さらに土層の色調が判別しやすい黒褐色土上面まで掘り下げることとした。半割部分についてT字形にサブトレンチを設定し、地山面を確認することとした。その後、土層断面を観察し、残る部分も黒褐色土上面まで掘削し精査した。1号塚ではさらに遺構の周囲についてもサブトレンチを設定し、地山面まで掘り下げ周囲の遺構について確認した。全ての調査地点について遺物及び遺構の有無を確認しながら地山面まで掘り下げ精査した。調査区域内には立木やそれに伴う根が無数に張り巡り、3号塚の墳頂部近くに位置する立木については地権者に了解をとり伐採したが、塚状遺構の周辺の立木は伐採せずに調査をすすめた。また、太い根についてはそのままの状態にしておいたものもある。完掘後、雪中に埋もれていない排出土を人力で埋め戻し調査を終了した。なお、半割の遺構断面測量及び遺構完掘後平面測量は業者委託とした。

6 調査結果

1～3号塚は北側の山々の裾野際のなだらかな南に下がる傾斜地に位置する(第12図)。1号塚の西方は西に向かって急傾斜となっている。このような地形から各塚の北側のマウンド状の盛り上がりは南側に比べゆるやかな勾配となり、塚の縁際には僅かではあるが平坦面が見られる。1・2号塚は約2m離れ東西に並列し、3号塚は1・2号塚の7～8m南に位置する。1号塚と2号塚の間の立木は土地所有の境界となっており、3号塚については東西おおよそ半分ずつ土地所有が二者に分かれているという話を調査中伺った。1・3号塚の平面形はほぼ円形でいずれも径約4mを測る。2号塚は東西に細長く、南北の径は約2.5mで、東西は立木があるがおおよそ4m位。墳頂部の標高は1～3号塚がそれぞれ約120.9m、121.05m、118.9mで1・2号塚では殆ど比高差はない。塚状遺構外の層序は1号塚西側サブトレンチで確認し、次のとおりである。腐葉土である薄い褐色土の表土層の下に暗褐色土、暗褐色土と地山の漸移層、地山の黄褐色土と続く。さらに西端では暗褐色土の下に黒褐色土が認められる。

(1) 塚土層(第13図)

土層は観察により下記の8区分に分類した。

- I層：表土 褐色土 腐葉土層 しまりなし
 II層：塚盛土 暗褐色土 粘性なし しまりなし 地山粒が
 僅かに入る
 III層：塚盛土 暗褐色土と地山の混じり 地山の混入度が強
 い また黒褐色土も混じる粘性なししまりややあり
 IV層：暗褐色土 II層より暗い 粘性なし しまりなし
 V層：暗褐色土 II層より暗くIV層より幾分明るい 粘性や
 やあり しまりややあり
 VI層：黒褐色土 粘性ややあり しまりあり
 VII層：黒褐色土と地山の混じり 漸移層 粘性ややあり し
 まりあり
 VIII層：黄褐色土 地山

1・2号塚また3号塚の西側では木の根の攪乱が多く見受けられる。

3基の塚の土層状況及び遺構外の層序からV層が旧来の層と考えられ、II～IV層が盛土材と捉えられる。悪天候も重なり1号塚付近でしか確認できなかったが、サブトレンチ西及び南側の層序から1号塚近くには暗褐色土の下にVI層は認められず掘削箇所端にVI層が検出され、また北側サブトレンチの表土下には地山が確認されたことからことから1号塚の封土は周辺の土を削り出し盛って築造されたものと思われる。3号塚の南北では周辺の削り出しは確認できなかった。2号塚ではIII層盛土材が見受けられなかったが、従来の層の上にIV・II層がほぼ水平に盛られている。1号塚断面ではII～IV層が不整形で一定ではない。3号塚ではIV層が認められず、V層上面北側にはIII層が、南側にはII層が盛られている。

1号塚の墳頂部は半円形に盛り上がりを示すが、2・3号塚では平坦部をもち、3号塚ではそれが地山斜面に沿い南向きに傾斜している。葺石はなく、経塚のように経典を納めた施設や埋葬した痕跡など各塚の内部施設は全く見られなかった。単に土を盛ったものと考えられる。

(2) 基底部等

基底部は植物根の攪乱が多くまた、悪天候で十分な調査を行うことができなかったため明確な削り出しの形状を見出すことはできなかった。各塚の構築時期や築造方法が一定とは限らないが、3号塚ではIII層とIV層が南北に分かれて盛られていることから基底部をVI層として捉えることとした。半割の際はIII層とIV層との識別が困難であったため精査をしながら

らⅣ層上面まで掘削したが、遺構は検出されなかった。さらに下部について遺構や遺物の有無を明確にするため、いずれの塚も地山面まで掘削したが掘削範囲内において周溝やその他の遺構及び遺物は確認されなかった。

(3) 遺物

出土物は3号塚封土内中央西側から近現代の陶磁器片2点と同じ箇所から検出された。2点とも碗の口縁部片である。1号塚墳頂部から大きさ34cmと25cmの礫2点が並んで確認され、地山直上からは径35cmの礫1点が検出された。3号塚封土内中央から広い面を下にして大きさ55cmの一部自然欠落した角張った礫が検出された。また、南東部の伐採した立木株の攪乱中から径65cmの礫が確認された。伐採立木株の年輪は約40を数える。2号塚では封土内を含み地山面まで小礫が少し検出された。これらの礫は全て加工痕のない自然礫で表面には何も記されていない。

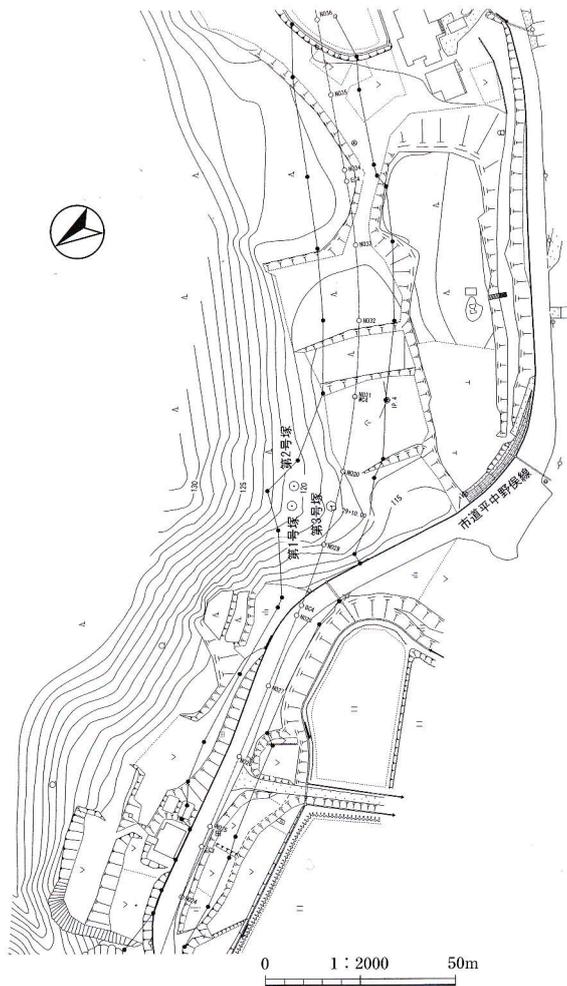
3号塚出土の2点の陶磁器片は状況から塚の構築時期と関連付けられる資料となり得るが、検出された礫の性格については不明であり、塚との因果関係を示すものは何もない。

遺物の出土は全ての塚において皆無である。

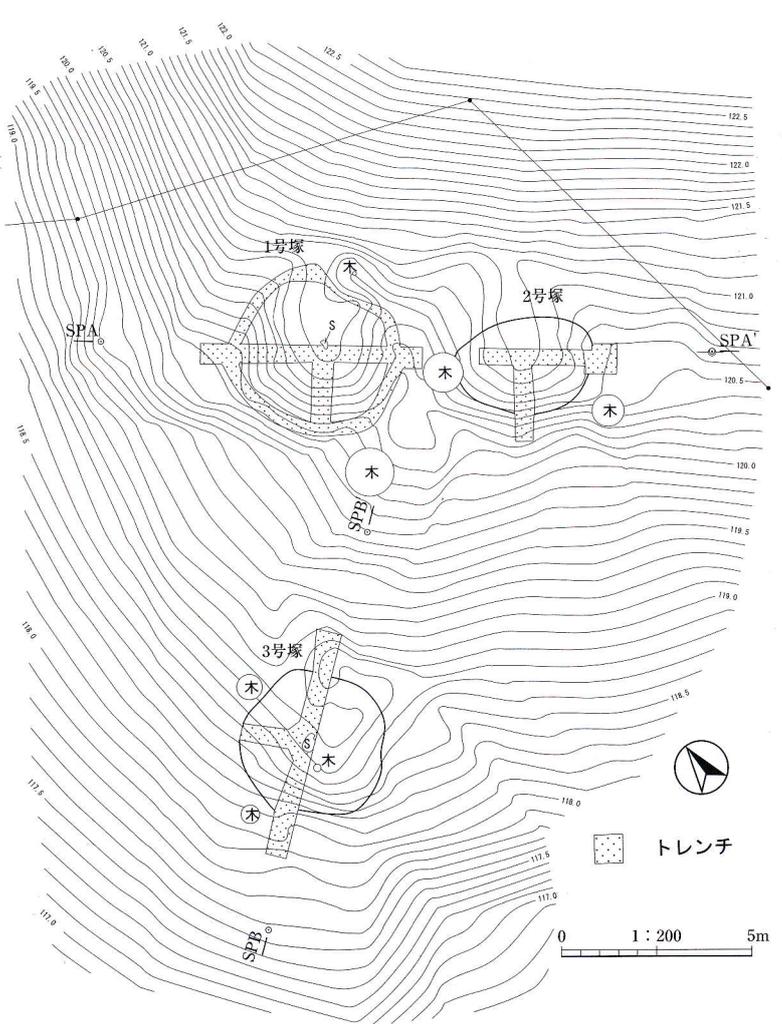
7 まとめ

大雪という悪天候で積雪の中、期間が限られた中で調査を行うこととなり、十分な調査を行い得たとは言い難い。しかし、3号塚では構築の際に埋め込まれたと思われる陶磁器片が検出されたことから、当塚は近現代に築造されたものと捉えられる。塚の性格については明らかではないが、分布調査時、古老等からの聞き取り調査で土地の所有地境界の目印として塚を構築し中に茶碗等を入れておくという風習と関連するものであろうか。1・2号塚については宗教的な内部施設や資料あるいは埋葬物等の出土品は検出されず、塚の構築時期や性格を示す手がかりを把握することはできなかった。

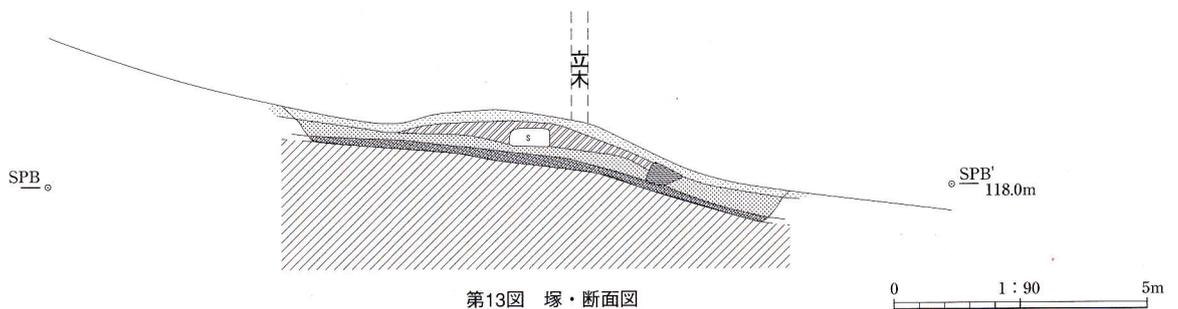
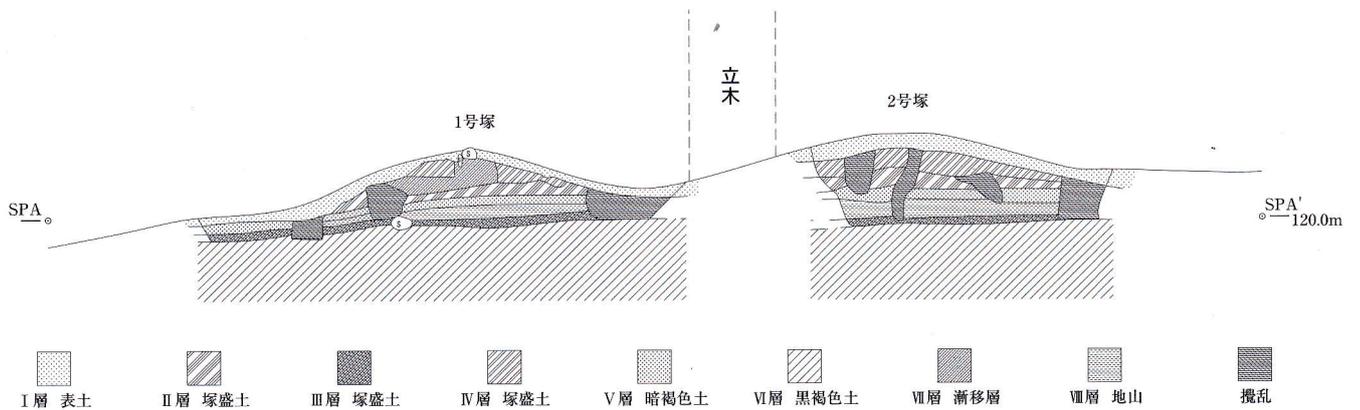
しかし、塚の形状、規模等の状況から、近世以前に構築された塚である可能性が想定される。県教育委員会との協議の結果、近世以前の宗教関連の遺構であると判断し、「荒田1号塚」「荒田2号塚」「荒田3号塚」として周知化の手続きを行うこととした。



第11図 調査範囲図



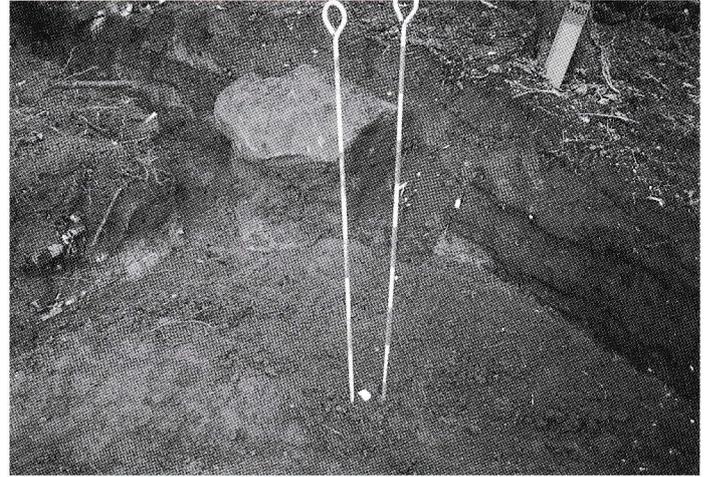
第12図 塚・地形測量図



第13図 塚・断面図



19. 荒田 1 号塚 断面 (南から)



20. 荒田 1 号塚 断面 (南から)



21. 荒田 2 号塚 断面 (東から)



22. 荒田 2 号塚 地山面まで完掘後 (南から)



23. 荒田 3 号塚 黒褐色土上面掘削後状況 (北から)



24. 荒田 3 号塚 土層断面 (西から)



1 調査目的

栃尾市原町地内に所在する県立栃尾高校のテニスコートにおいて造成工事が計画された。当該地は、周知の金沢(A)遺跡に隣接する(第14図)ことから、遺跡の範囲と内容を把握し、施工時の取扱い資料を得るために確認調査を実施した。

2 調査地

栃尾市原町4丁目21番 金沢(A)遺跡(遺跡番号18)

3 調査面積 24㎡ (2m×3mのトレンチ4箇所)

4 調査方法

調査範囲内に任意のトレンチを設定し(第15図)、重機による掘削、人力による精査を行い、遺構、遺物の有無を確認した。その後、土層堆積状況、トレンチ位置などを図化した。

5 調査結果

(1) 基本層序(第16図)

- I層：盛土(テニスコート造成土)
- II層：暗灰色シルト(旧表土)
- III層：褐灰色粘質シルト(旧床土)
- IV層：黒褐色シルト(炭化物粒子が混入)
- V層：黒褐色シルト(遺物包含層)
- VI層：オリーブ灰色砂質シルト(遺構確認面)

(2) 出土遺物

- 1 Tr：縄文土器片2点(V層)
- 2 Tr：剥片1点(IV層)
- 3 Tr：縄文土器片2点(V層)
- 4 Tr：石核1点(IV層)、寛永通宝(III層)

(3) 遺構(第17図)

- 1 Tr：ピット1基
- 4 Tr：土坑1基、ピット3基

6 まとめ

調査の結果、現地表下1.5～2mに遺物包含層が安定的に存在し、遺構の存在も確認された。出土土器は、縄文時代中期～

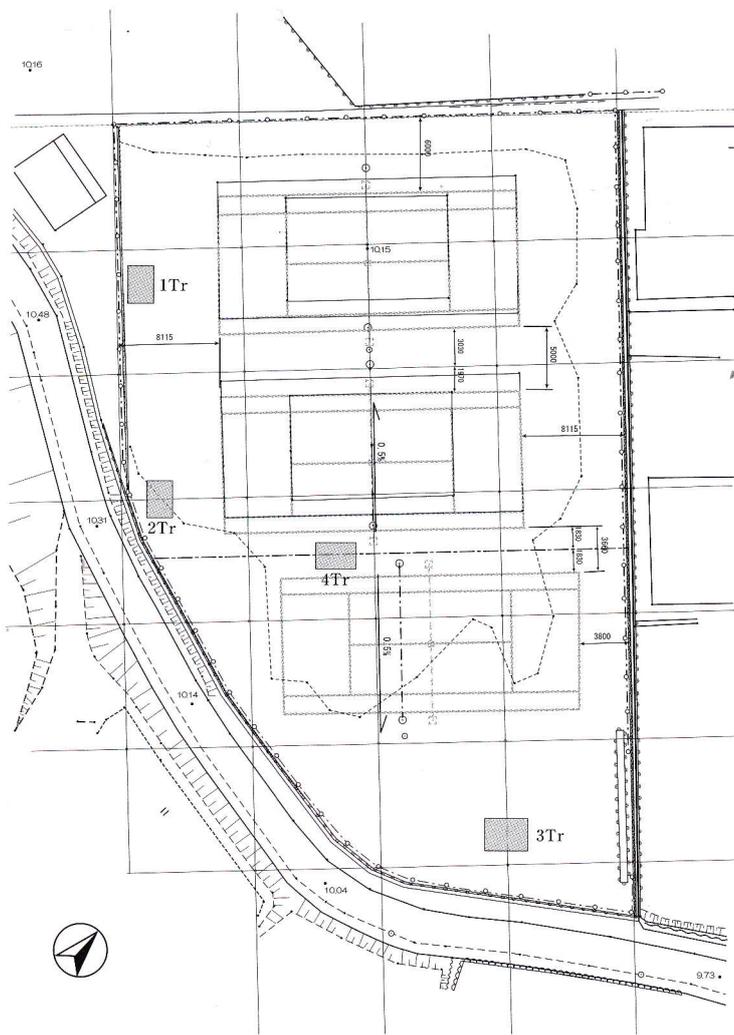
後期に帰属すると考えられる。周知の遺跡範囲は、高台（畑地）に限定されていたが、低地側（栃尾高校）まで延伸することは確実であり、周知範囲を拡張する必要がある。また、高台との境にある崖線から離れるに従い、遺跡の深度が深くなり、旧地形が傾斜している様子が理解された。

今回の施工は地表面から30cm程度の表層の入替え工事となる。1 mを超える十分な保護層が確保されることから慎重工事として取扱うこととする。



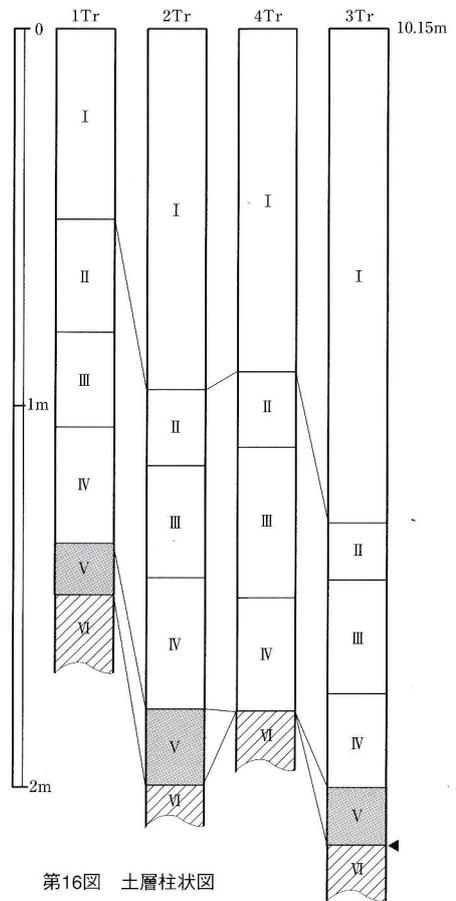
第14図 調査範囲図

0 1 : 3000 100m



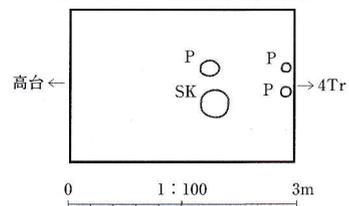
第15図 トレンチ位置図

0 1 : 500 60m



第16図 土層柱状図

第17図 4Tr 遺構検出平面図

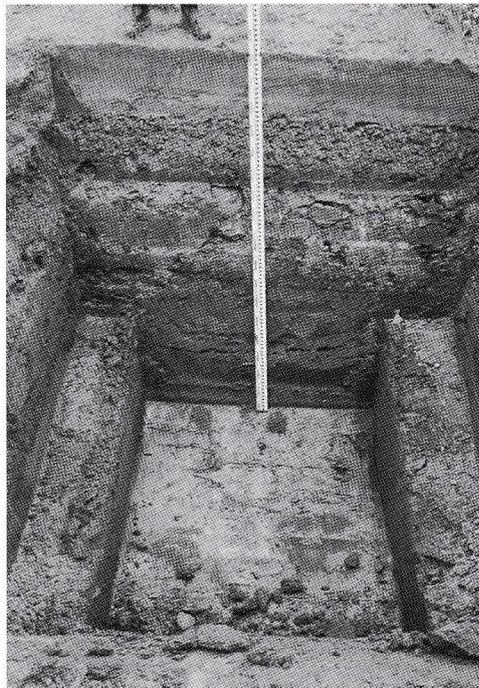




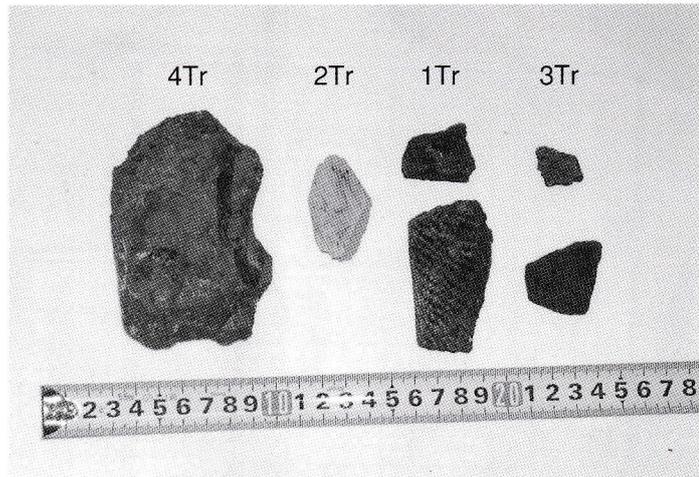
25. 金沢(A)遺跡 1Tr 断面 遺構検出 (西から)



26. 金沢(A)遺跡 2Tr 断面 (西から)



27. 金沢(A)遺跡 4Tr 断面 (南から)



28. 金沢(A)遺跡 出土遺物



1 調査目的

栃尾市大字北荷頃および大字本津川地内で林地開発による土砂採集工事が計画されている。そこで平成14年8月28日、9月30日に事業予定地の分布調査を実施したところ、かつて石仏が祀られていた台座（石組）の存在が明らかになった。石仏は、中世～近世に遡るものと考えられた。そこで、台座である石組の年代、内容の把握を目的として試掘調査を実施した。

2 調査地 栃尾市大字北荷頃字高森1524

3 調査面積 40㎡

4 調査方法

調査対象地（山頂部）の樹木および下草を刈り取り、人力で表土を除去して石組および周囲の地形を観察した。その結果、人為的に地形が改変された可能性が考えられ、一部にトレンチを設定して掘削調査した。あわせて、石組および対象地の地形を測量、図化した。図化作業終了後、石組を取り外し完掘した。

5 調査結果

(1) 基本層序

I層：表土（10～20cm）

II層：漸移層（10cm）

III層：橙色礫混じりシルト（地山）

(2) 出土遺物（第29図6）

石組内から古銭（寛永通宝）1点が出土した。石仏および石組の年代を反映する遺物と考えられる。

(3) 遺構（第19・20図）

石組は「コ」の字状に配置され、開口部が正面になると考えられる。「コ」の字の中央には、石仏が安置されたと考えられる扁平な礫が据えられていた。また、開口方向の延長上には尾根上の道（参道？）が位置する。すなわち急峻な山道を登りつめて山頂にたどり着くと正面に石仏が位置することとなる。

石組の正面には、人為的に作出された可能性が高い直線的な段差が認められる。これは、石仏に関連する施設の可能性



長太郎薬師石組

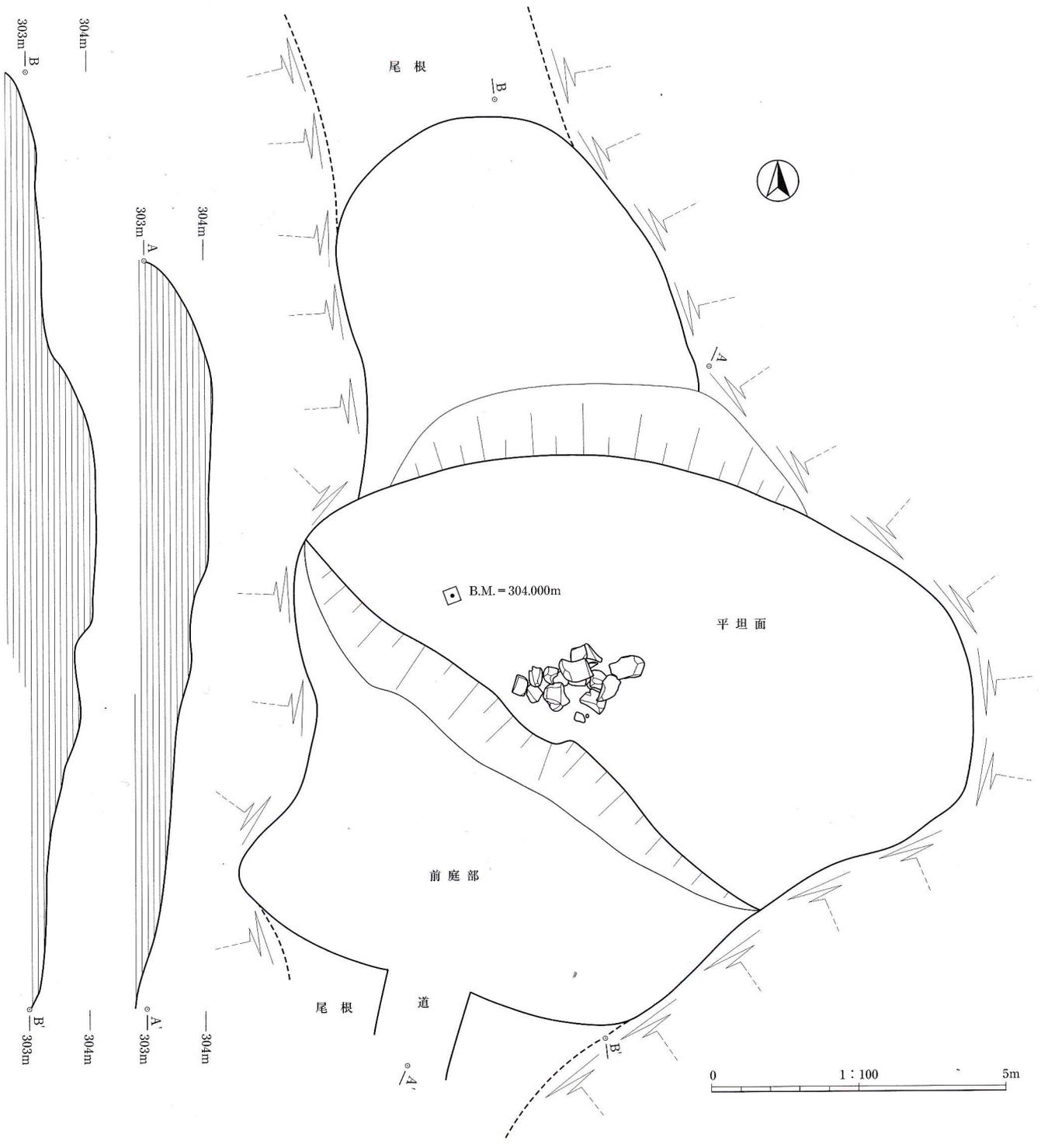
が高い。また、石組の北側には隣接するようにヤマツツジの大木が繁っていた。ヤマツツジは周辺で自生する樹種ではあるが、位置関係やその大きさを勘案すると関連性が想定される。

6 まとめ

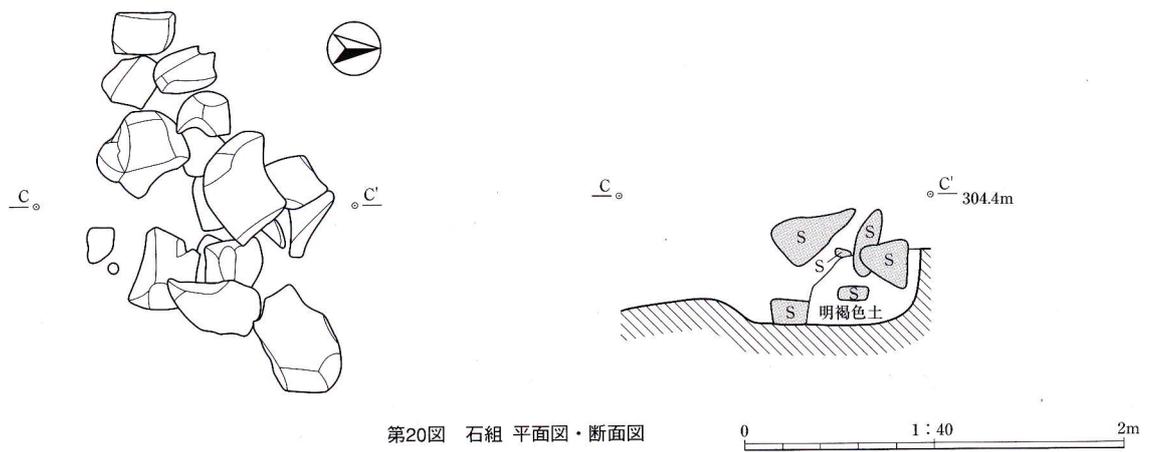
かつて祀られていた石仏は、地元で長太郎薬師と呼ばれるもので、現在は移築されている。今回の調査では、その台座と考えられる石組を中心に調査した結果、江戸時代に遡る可能性が高いことが明らかになった。地元では古くから信仰の対象とされてきたものであり、地域にとって重要な文化財とされてきた。今回の調査では遺構を完掘したが、この調査記録を後世に末永く伝えていく必要がある。なお、調査は終了したため、工事にあたって支障はない。ただし、工事中に遺構、遺物が発見された場合は、別途協議が必要となる。



第18図 調査位置図



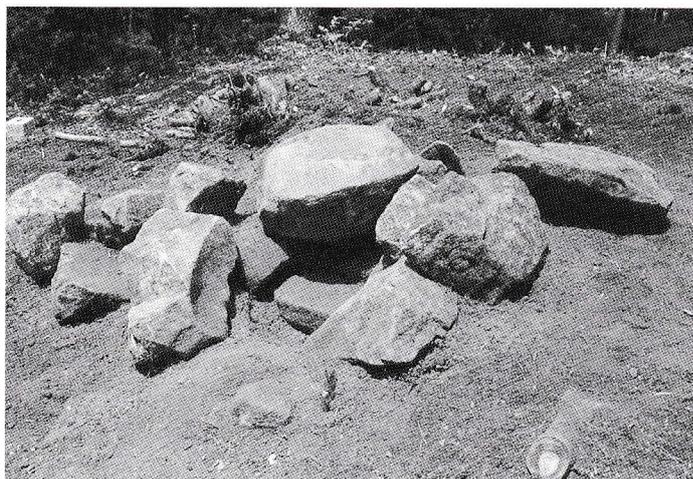
第19図 調査範囲 平面図・断面図



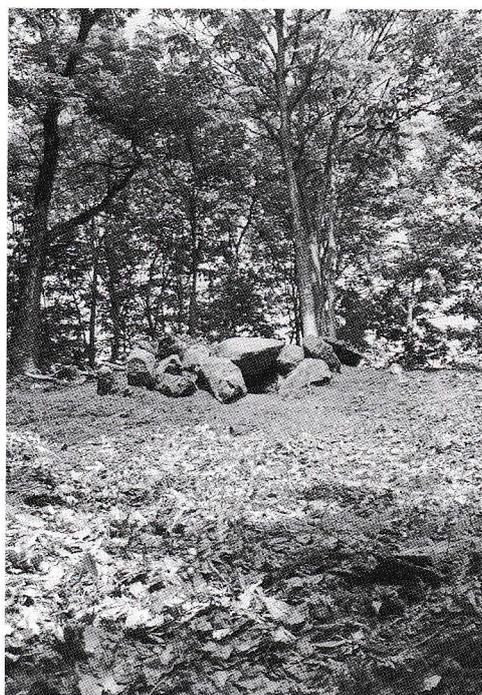
第20図 石組 平面図・断面図



29. 長太郎薬師 石組検出 (正面から)



30. 長太郎薬師 石組検出 (正面右から)



31. 長太郎薬師 近景 (正面から)



32. 長太郎薬師 石組の下部構造検出 (正面から)



33. 移築された長太郎薬師



1 調査目的

栃尾市大字葎谷地区において、新潟県長岡地域振興局農林振興部による農業基盤総合整備事業（ほ場整備、農業生産基盤整備、生活環境基盤整備）が計画されている。事業地内に周知遺跡は存在しないが、時代不明の塚1基及び石造物が存在したことから周辺に集落等の存在が予想された。そこで平成15年10月29日、11月5日に試掘調査を実施したところ、集落跡等は検出されなかった。しかし、時代不明の塚にサブトレンチを設定して土層を観察したところ、従来から存在した塚の上にはほ場整備に伴い盛土を重ねた可能性が推測された。そこで、塚の年代と構造を把握するために補足調査を行うこととした。

2 調査地 栃尾市大字葎谷302ほか

3 調査面積 30㎡

4 調査方法

掘削前の状況記録については、平成15年度に実施済みであったため、塚の周囲に排水溝を設定したうえで、表土から層位ごとに人力掘削した。作業を進める過程で、地表面に顕在化していた塚の下部に、元来の塚を検出した。その検出段階で掘削作業を中断し、写真撮影、地形測量等の必要な記録を行った後に半截した。その後、断面の記録をとったうえで地山まで完掘し、地山にサブトレンチを設定して調査を終了した。



井田塚（試掘作業中）

5 調査結果

(1) 基本層序

調査範囲周辺の基本堆積は、おおむね変化が見られない。

I層：表土、盛土

II層：黒色土（旧表土、自然堆積であり、周囲に安定的に存在）

III層：灰色砂質シルト（漸移層）

IV層：黄灰色砂質シルト（地山層、シルト岩を多量に含む）

(2) 出土遺物

ほ場整備後に成形された盛土上に石造物が安置されていた。その内訳は、宝篋印塔相輪6、宝篋印塔笠1、火輪1、

水輪 1、地輪 5、分類不明 6 であり、セット関係が不明瞭である。これらは、ほ場整備時に周辺から出土したものを集合して祀ったものであろう。なお、これらの形態的特徴から、江戸時代前期に位置づけられるものと考えられる。

このほか、現代の盛土中から近世磁器（18世紀）1点、周囲の試掘調査で確認された黒褐色土層（Ⅱ層）に相当する9層（塚の最上部の黒褐色土）から縄文土器（中期中葉）3点が出土した。これらは、いずれも塚の年代に伴うものではない。

（3）遺 構（第23～26図）

今回の調査で、現地表面に顕在化していた塚は、ほ場整備時に過去から存在した塚に盛土を重ねた結果であることが明らかになった。旧来から存在した塚は、直径3.6m、高さ0.7mほどを測る。塚を半截して堆積状況を確認したところ、基本堆積Ⅱ層に対応する黒色土層から構成されていた。黒色土はしまりが弱く、地山の傾斜に平行する水平堆積であることから盛土でない可能性が想定された。すなわち、塚は周囲を削り取って台状に残した結果、形成されたものと評価できる。また、その上には、西側を中心に地山混じりの粘質土が表面に盛られていた。これは塚の形成後に塗り重ねられた「化粧土」のような性格のものであろうか。

なお、塚を完掘した後、その直下と周辺とで土質が異なった。塚の下部は黄橙色のシルト岩混じり砂質シルトが、周囲は青灰色のシルト岩混じり粘質シルトであった。両者では、構成する土質は似ているが、色調と粘度が異なった。この相違は、塚が水田耕作以前から造成されていたことの裏返しということもできる。

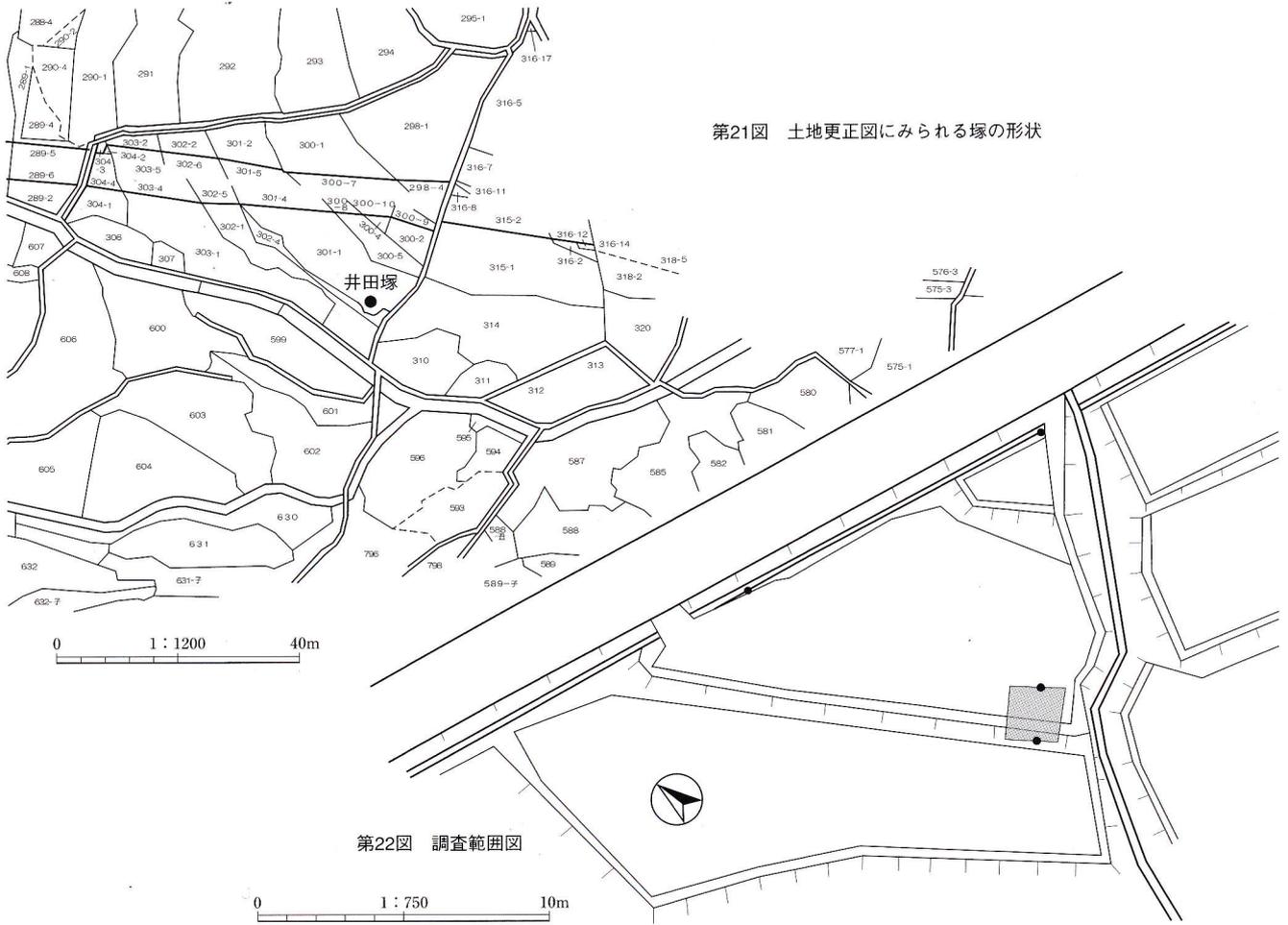
6 ま と め

今回の調査で塚を完掘した。その結果、現地表面から観察された塚は、従来から存在した塚の上に盛土を重ねて形成されていたことが明らかになった。旧来から存在した塚の形成年代については、出土遺物等から明らかにできなかったが、明治23年作成の土地更正図には、すでに塚の存在を窺える土地の形状が図化されている（第21図）。このことと出土した磁器の年代を勘案すれば、少なくとも江戸時代には塚が存在したものと考えられる。

また、塚の上に祀られていた石造物は、江戸時代前期に比定

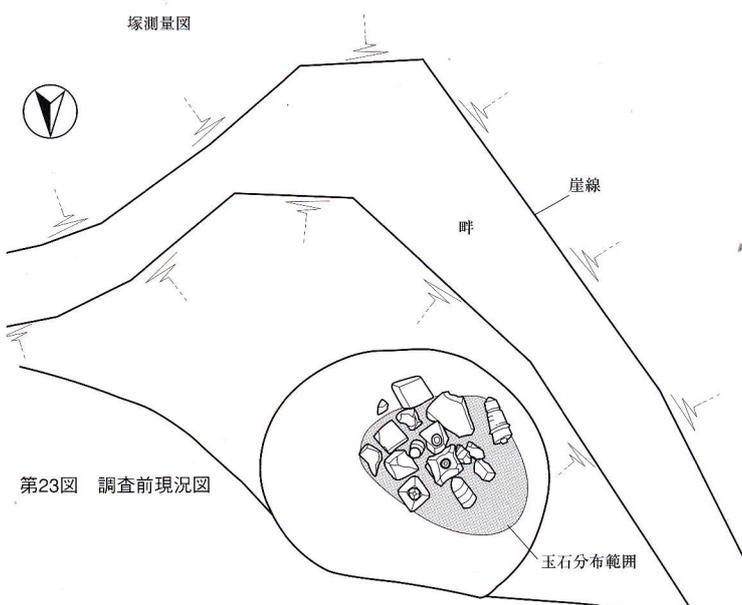
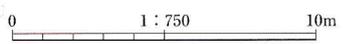
されるものである。それらのセット関係は明瞭でなく、現在の位置がそのまま造立された場所とはいえないが、ことさら遠く離れた場所に運ばれたことは考えにくい。このことから周囲に集落跡が存在する可能性を考慮して試掘調査を実施したが、遺構、遺物は検出されなかった。江戸時代の絵図等をもとに当時の景観を検討することは、遺構を評価するうえで重要な情報となろう。

なお、今回は当該遺構を「塚」として報告したものの、盛土により形成されたものではない。周囲の地盤を削り出すことにより形成されている。すなわち、通常の「塚」の定義からすれば、典型例とは言い難く、特異な事例といえる。一方、地域では「塚」と認識されながら現在に至っている。このような背景を勘案して、当遺構については小字名をとって「井田塚」としたい。

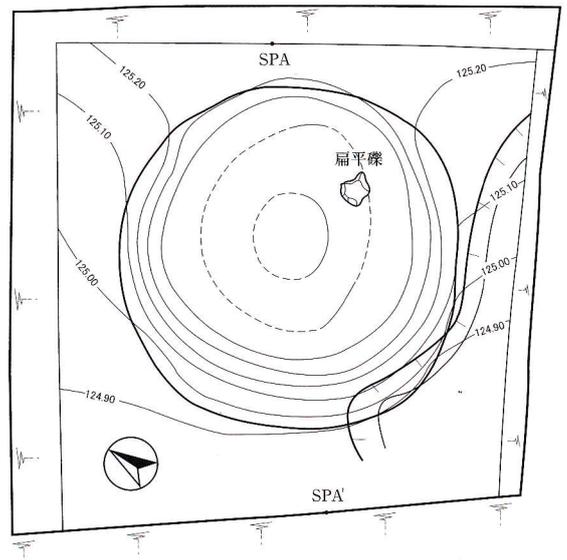


第21図 土地更正図にみられる塚の形状

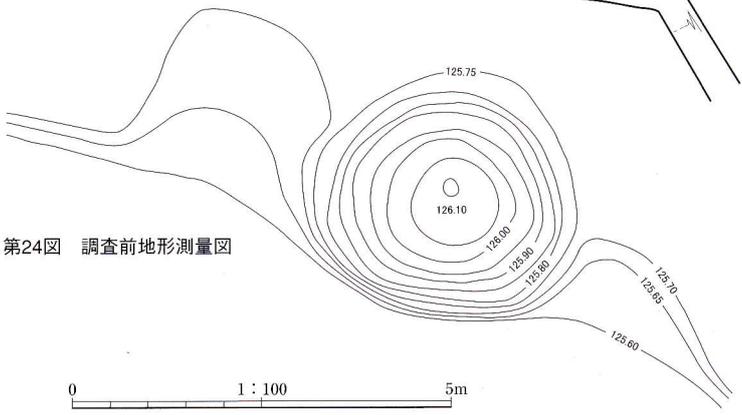
第22図 調査範囲図



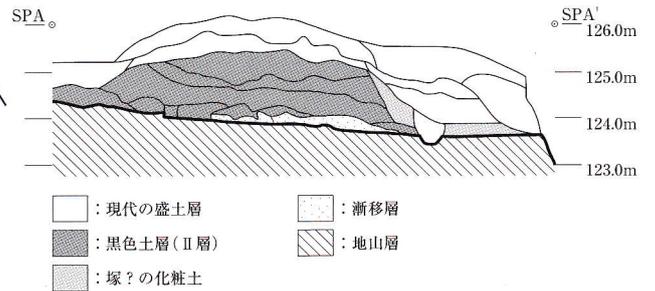
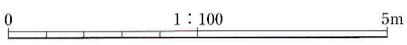
第23図 調査前現況図



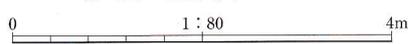
第25図 塚検出状況測量図



第24図 調査前地形測量図



第26図 塚断面図





33. 井田塚 現況 (東から)



34. 井田塚 石塔類の集積状況 (北から)



35. 井田塚 旧状の検出 (南から)



36. 井田塚 断面 (西から)



37. 井田塚 完掘 (西から)

第IV章 考察

1 仲崎遺跡の遺物について

1 遺物の概要（第27・28図）

仲崎遺跡では、狭小な調査範囲にもかかわらず、竪穴住居1基・土坑3基等の遺構に伴って良好な遺物が出土した（第三章1参照）。まず、遺構検出の遺物を中心にその詳細を以下に記載する。

1～3はSI1覆土出土の土器。1は集合沈線をタスキ状に施し、口縁端部には刺突文を加える。胎土に微量の植物繊維を含むことから、前期前半の羽状縄文系土器（関東地方の関山式～黒浜式並行の在り系か）とみられる。覆土に混在したものであろう。2は折り返しの肥厚口縁をもつ口縁部片、3は竹管沈線を施す口縁部片。いずれも深鉢で中期前葉の北陸系土器である。

4～21はSK1から出土した土器・土製品。4～14までは覆土下層（3層）出土。4は口縁端部に小突起をもつ深鉢片。端部には縦位の撚糸側面圧痕文を施す。5は4単位の波状口縁をもつ深鉢の胴部上半部で、波状部の中央はややくぼみ双山状を呈する。口径約18.0cm。竹管沈線・連続爪形文に円形状の区画が組み合わされている。6～10は竹管沈線・刻目・隆帯などを施文する細片。11・12は斜行縄文（原体RL）を施す胴部片である。13は斜行縄文（無節R）を施す深鉢の底部片。底径約8.2cm。底面には網代の痕跡が残る。14はほぼ完形の土偶で、頭部の一端が僅かに欠損する。長さ10.2cm、幅6.8cm、厚さ5.8cm、重量281.1g。頭頂部はほぼ平坦な花卉状で、後端には刻目と穿孔1箇所がみられる。顔面部や腕部を含む胴部上半及び脚部は省略。胴部下半が強調され、下腹部が大きく膨らむ形態を呈する。正面側には沈線と刺突文による文様が表現されている。また腹部中央には、径約12～15mmの孔が底面まで貫通する。背面側は反り返る形で「し」の状の沈線が垂下し、臀部付近はU字状に緩くくぼむ。15～21はSK1の覆土上層（1層）から出土した土器。15～17は中期前葉の北陸系土器の深鉢片で、竹管沈線や連続爪形文を施す。18は口縁部片で端部に斜行縄文、その下部に沈線文を組み合わせる。東北系か。19は隆帯に刻目を加える胴部片。20・21は微隆帯や押し引きの沈線文で文様を表現する。胎土には多量の雲母を含む。関東地方の阿玉台I式

の影響を受けた土器であろう。その他、SK 1 の 1 層出土土器には、多量に植物繊維を含む斜行縄文の細片 1 点があり、前期前半の羽状縄文系土器とみられる

22はSK 2 から出土した土器。小形深鉢の胴下半～底部で、底径約6.4cm。外面に斜行縄文 (LR) を施している。

23～26は包含層 (II層) 出土の土器。23は隆線で文様を区画し、波状の沈線を加える。24・25は細沈線と斜行縄文の地紋が認められる。26は底部片である。

27～30は石器類。27・28はSK 1 の覆土 3 層、29は同 1 層から出土した。27は削器状のスクレイパーで、長さ3.6cm、幅5.3cm、厚さ0.8cm、重量19.6 g。石材は頁岩。表面左側縁に 2 次加工を施し、刃部を作り出している。28は石核とみられる。長さ4.1cm、幅4.0cm、厚さ2.3cm、重量37.5 g。石材は鉄石英 (黄玉)。29はスクレイパーで、長さ6.6cm、幅6.2cm、厚さ3.1cm、重量89.0 g。石材は玉髓。表面下端に裏面側からの剥離痕が認められる。30・31は包含層出土。30はスクレイパーで、縁辺に 2 次加工を施す。長さ4.5cm、幅5.1cm、厚さ2.3cm、重量44.2 g。石材は流紋岩。31は凹石で、長さ9.0cm、幅8.6cm、厚さ6.4cm、重量535.6 g。石材は砂岩。表裏両面に摩滅したくぼみ痕が残る。

2 遺物の特色とその評価

出土した土器の様相をみると、細片のため時期の詳細が不明なものや他時期のものも混在しているが、その主体は縄文時代中期前葉である。SK 1 出土の 5 に代表されるように、新崎式土器に並行する北陸系土器 (6～8・15～17など) を主として、東北系の大木7b式 (4) や関東系の阿玉台 I 式類似の土器 (20・21) などが少量組成する。5 にみられる波状口縁の形態は、新潟方面の特徴をよく示しており、三島郡三島町千石原遺跡〔中村他1973〕や南蒲原郡栄町吉野屋遺跡〔三条商業高等学校社会科クラブ考古班編1974〕などに類例がある。これらの様相から中期前葉でも新段階〔高橋・寺崎1999〕 (前葉 4～6 期) に位置づけられる。検出された竪穴住居跡及び土坑はいずれもこの時期に構築された可能性が高く、時期的には短期間に限定されよう。

出土遺物の中で特筆されるのはSK 1 の下層から出土したほぼ完形の土偶である。時期的には伴出した土器から中期前葉に位置づけられる。頭頂部の形状から、いわゆる河童形土偶の範

疇に属するものであろう。頭部や顔面を省略する土偶は稀に認められるが、胴部が板状をなす中期中葉以降のものとは表現手法が異なっている。その類例は乏しく、管見では栄町吉野屋遺跡の資料〔新潟県編1983〕（図版151上の右下、個人所蔵）に限られるようである。胴下半の形態や文様構成が類似し、さらに腹部に孔を穿つ点も共通している。確実に中期前葉にまで溯る土偶は県内では稀少であり〔佐藤2003〕、本資料は土偶の出現期の様相を探る上で貴重な資料として評価される。その出土状況からは祭祀行為に伴って意図的に廃棄された可能性も考えられよう。

1 遺物の概要（第29図）

宮中遺跡では、平成12年度の確認調査及び平成15年度の工事立ち会いで、フラスコ状土坑を含む土坑やピットが検出され、それらに伴う遺物も少量出土した（第Ⅲ章2参照）。以下遺物の詳細について記載する。

1は平成15年度検出のフラスコ状土坑から出土した小形土器で、口縁部を一部欠損する。口径約7.7cm、高さ9.8cm、底径7.3cm。口縁部が僅かに内湾する形態を呈する。外面は斜行縄文（RL）を施文する。内面には口縁部と底部付近にベンガラ（酸化第二鉄）とみられる赤色付着物が認められる。また外面の底部付近にも僅かではあるが付着している。底面に残る筋状の圧痕は葉脈か。その他、同遺構からは深鉢の細片約20点が出土している。

2～5は平成12年度検出の遺構等から出土した土器。2は8T-P3覆土出土で、沈線文（縁帯文）を施す口縁部片。3は6T-SK3覆土出土で、沈線による渦巻状の区画に斜行する細沈線を充填する。4は8T-P2覆土出土で、隆帯に細かい刺突を加える。5は法面清掃時検出の土師器で、碗の体部または小型壺の胴部片とみられる。

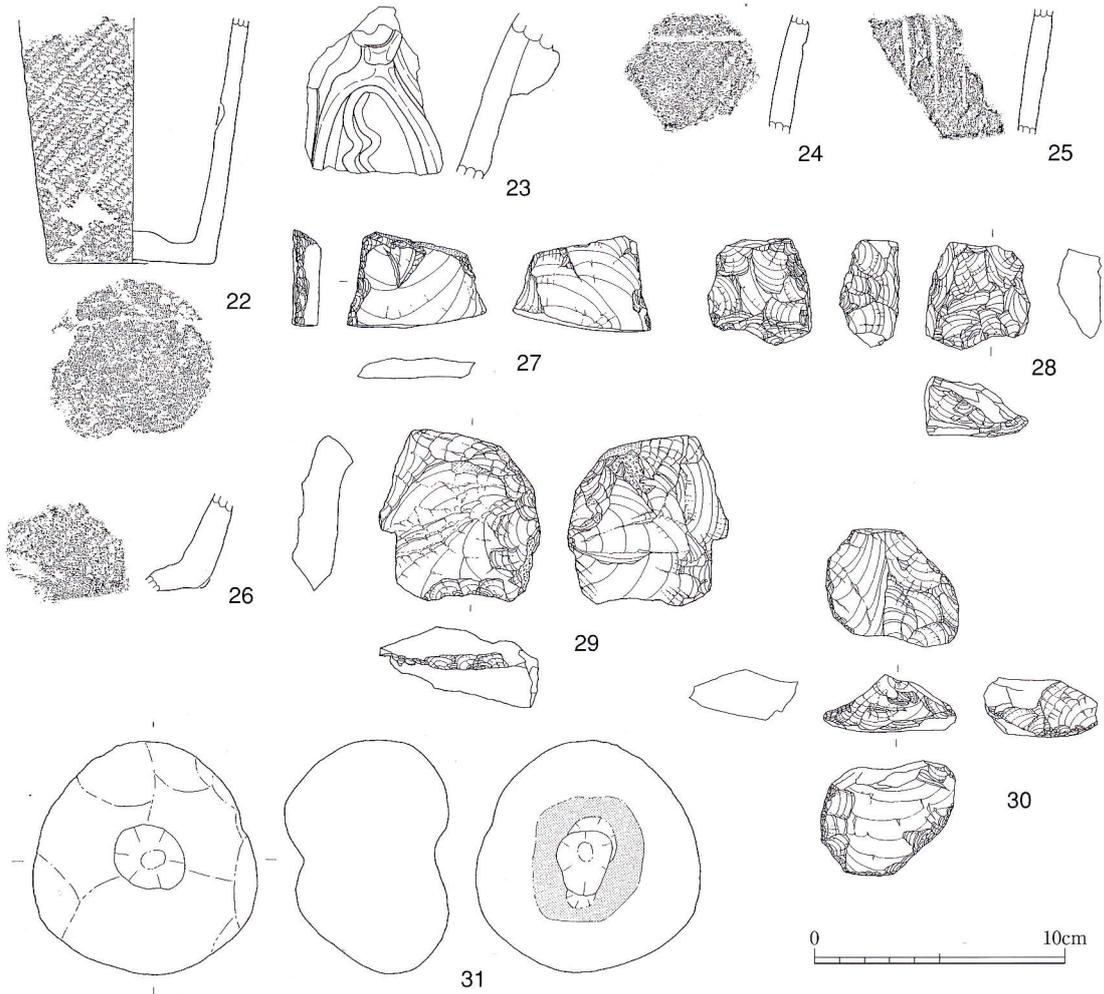
2 遺物の特色とその評価

縄文土器の文様からは、2は後期前葉の南三十稲場式、3は中期中葉の大木8b式、4は中期末葉～後期初頭の各段階に位置づけられる。また、5の土師器は平安時代の所産であろう。ただし、土器の出土点数が極少量のため、遺跡の主體的な時期は不明である。

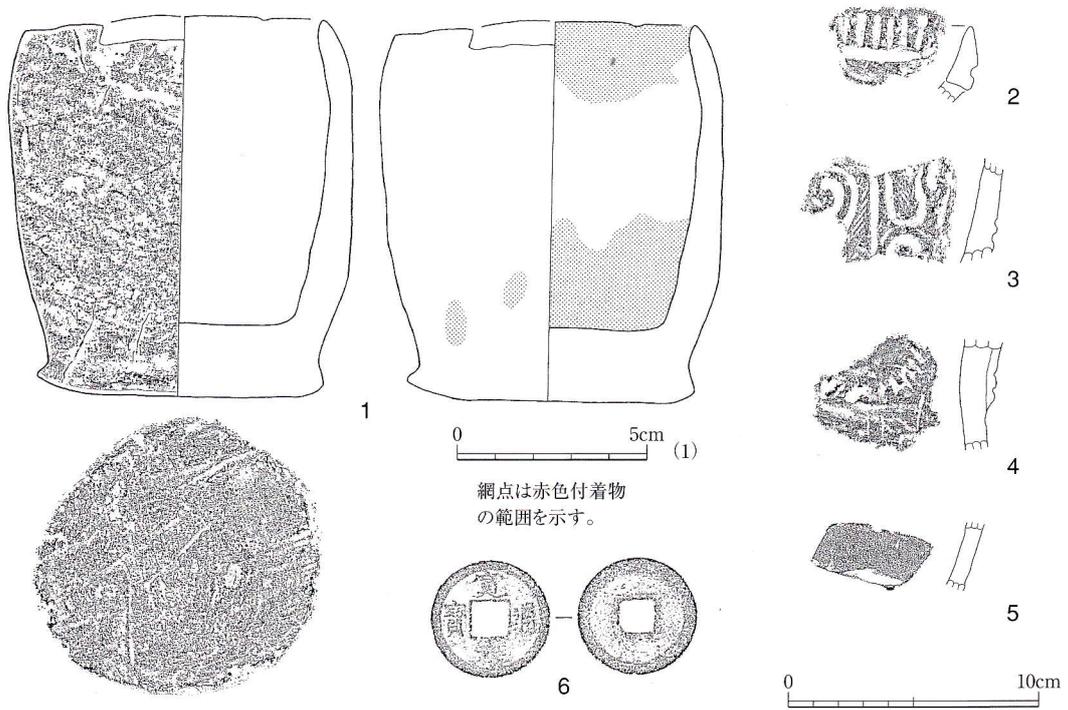
遺物で特に注目されるのは、フラスコ状土坑から出土した1の土器である。縄文を地紋とするため時期の詳細は不明であるが、土器の特徴及び土坑の形態から中期後半の所産と推測される。後期以降は円筒形状の貯蔵穴が主流であり、本遺跡のフラスコ状土坑は中期に位置づけられる可能性が高い。ベンガラとみられる付着痕からは、赤色顔料を保管していた容器と考えられる。フラスコ状土坑から出土した状況と合わせて貴重な資料である。今後、自然科学分析等を行い、付着物の詳細を明らかにしていく必要がある。



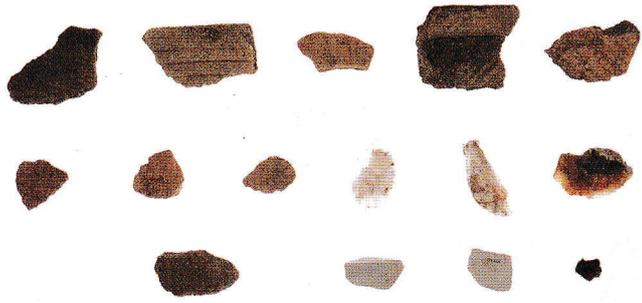
第27図 仲崎遺跡出土の遺物(1) (縮尺 14:1/2、その他:1/3)



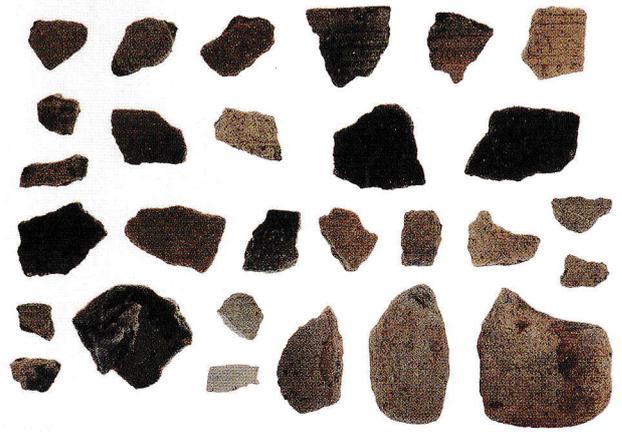
第28図 仲崎遺跡出土の遺物(2) (縮尺 1/3)



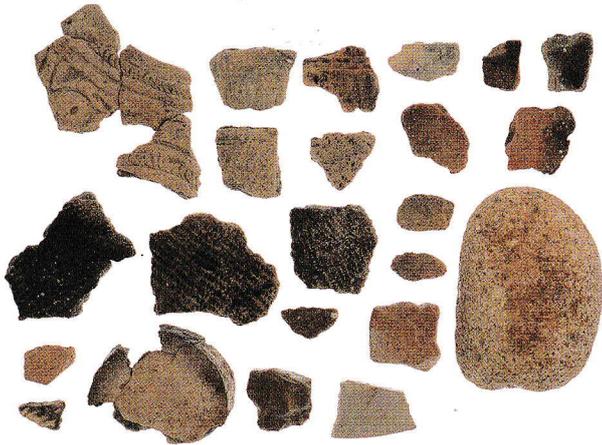
第29図 宮中遺跡(1~5)、長太郎薬師(6)出土の遺物 (縮尺 1:1/2、2~5:1/3、6:2/3)



1. 仲崎遺跡 SK1出土遺物



2. 仲崎遺跡 SK1 1層出土遺物



3. 仲崎遺跡 SK1 3層出土遺物



4. 仲崎遺跡 SK2 1層出土遺物



5. 仲崎遺跡 SK1 3層出土土偶 (表)



6. 仲崎遺跡 SK1 3層出土土偶 (裏)



7. 仲崎遺跡 II層（包含層）出土土器



8. 仲崎遺跡 II層（包含層）出土土器



9. 宮中遺跡 出土土器



10. 宮中遺跡 出土土器



11. 宮中遺跡 出土土器



12. 宮中遺跡 出土土器

引用参考文献

- 栃尾市教育委員会 1977 『栃尾市史 上巻』
- 栃尾市教育委員会 1988 『栃尾の城館』
- 栃尾市教育委員会 1995 『栃尾市埋蔵文化財調査報告書(3) 栃尾城跡(館跡)』
- 齋藤秀平 1937 「新潟県における石器時代遺蹟調査報告」『新潟県史跡天然記念物調査報告書』第七輯 新潟県
- 佐藤雅一 2003 「新潟県における土偶研究の視点」『新潟考古』第14号 新潟県考古学会
- 三条商業高等学校社会科クラブ考古班編
1974 『吉野屋遺跡』 三条商業高等学校社会科クラブ考古班
- 高橋保・寺崎裕助 1999 「(第2章第2節第4項) 中期」『新潟県の考古学』 高志書院
- 中村孝三郎他 1973 『千石原』 長岡市立科学博物館
- 新潟県編 1983 『新潟県史』資料編1 原始・古代一 新潟県

報告書抄録

ふりがな	とちおししないいせきはくつちょうさほうこくしょ							
書名	栃尾市市内遺跡発掘調査報告書							
副書名	栃尾市埋蔵文化財調査報告書							
巻次	4							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	加藤 学 小熊博史 上村利明 酒井俊明							
編集機関	栃尾市教育委員会							
所在地	〒940-0222 新潟県栃尾市中央公園1番36号 Tel.0252(52)2020							
発行年月日	西暦2005(平成17)年3月20日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
仲崎遺跡	新潟県栃尾市大字 入塩川字仲崎3196 番ほか	15215	52	37°28′	139°03′	20031027 ～ 20031031	131m ²	農免道路整備事 業栃尾地区建設 計画
宮中遺跡	新潟県栃尾市大字 上樫出字宮中1884 番ほか	15215	9	37°29′	139°01′	20000522～ 20000526 20030602	38.3m ²	市道上樫出2・ 4号線道路改良 事業
四ツ割遺跡	新潟県栃尾市大字 島田字四ツ割68番 丙ほか	15215	126	37°29′	139°03′	20031030	41.6m ²	農業基盤総合整 備事業(ほ場整 備)
平中野俣塚群	新潟県栃尾市大字 平中野俣字荒田 1059番5ほか	15215	123 124 125	37°30′	139°05′	20021209 ～ 20021212	38.99m ²	市道平中野俣線 道路改良事業
金沢(A)遺跡	新潟県栃尾市大字 金沢字片桐67番	15215	18	37°29′	139°00′	20030710	24m ²	栃尾高校テニス コート改良事業
長太郎薬師	新潟県栃尾市大字 北荷頃字高森1524 番ほか	15215	127	37°27′	138°57′	20030514	40m ²	林地開発(土砂採 集事業)
井田塚	新潟県栃尾市大字 笹谷字井田302番ほ か	15215	128	37°30′	139°04′	20040531 ～ 20040604	30m ²	農業基盤総合整 備事業(ほ場整 備)
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
仲崎遺跡	集落跡	縄文時代中期前葉		竪穴住居1軒 土坑3基、ピット16基		縄文土器103点 土偶1点、石器12点		
宮中遺跡	集落跡	縄文時代 中期後葉～後期		土坑4基 ピット22基		縄文土器		
四ツ割遺跡	集落跡	中世～近世初頭		ピット20基				
平中野俣塚群	塚	不明		塚3基		陶磁器片2点		
金沢(A)遺跡	集落跡	縄文時代中期～晩期		土坑1基 ピット4基		縄文土器4点、剥片1点 石核1点、寛永通宝1点		
長太郎薬師	石仏	近世～近代		石組1基		寛永通宝1点		
井田塚	塚	近世～近代		塚1基		宝篋印塔6点		

栃尾市埋蔵文化財調査報告書(4)
栃尾市市内遺跡発掘調査報告書

発行者 栃尾市教育委員会
新潟県栃尾市
☎(0258)52-2020 FAX(0258)53-2234

印刷所 三条印刷株式会社
新潟県三条市元町9-3
☎(0256)32-2281 FAX(0256)32-2670